

第一回日本結核病學會總會演說要旨

開會ノ辭

會長 醫學博士 北里 柴三郎 君

茲ニ第一回日本結核病學會總會ヲ開ク、
本會創立ニ當リ、不肖ノ身ヲ以テ圖ラズモ、第一回會長ニ推サレタルハ、余ノ光榮トスル
所ナリ。學術ハ猶未開ノ曠野ニ屬スルモノ多ク、殊ニ結核ニ於テ然リトス、希クハ會員諸
賢、一層ノ努力ヲ以テ之ガ開拓ニ從ハレン事ヲ。

林間學校ノ結核豫防的意義

廣 瀨 幸 二 君 (東京)

私ハ白十字會林間學校ニ於ケル經驗ヲ述ベマス。白十字會ハ結核豫防撲滅ヲ期圖スル團體デアリマシテ、結核豫防ハ身
體ヲ強壯ニスルニ如カズ、身體ヲ強壯ニスルニハ其兒童期ニ於テ對策ヲ講ズルニ如カズト云フ見地カラ林間學會ヲ經營
スルニ至ツタノデアル。

林間學校ハ通學制ト寄宿制トガアツテ、各一長一短ハアルガ、白十字會デハ寄宿制ノ林間學校ヲ設ケタノデアル。白十
字會ノ林間學校ハ神奈川県茅ヶ崎ニアリ大正六年八月開校以來百四十七名ノ兒童ヲ收容致シタ。私ハ其中ノ百人ニ就テ

稍々詳シク調査スルコトヲ得タル故、其ヲ基礎ニシテ所見ヲ述ベタイト思フ。

云フマデモナク林間學校ハ虛弱ナ兒童ヲ收容スルノデアルカラ、本校デモ健康者ト患者殊ニ肺患者ヲ拒絶シ、腺病質、虛弱者、神經性ノ者、貧血其他病氣ノ恢復期ニ在ル者等ヲ收容スルノデアアル。斯ノ如キ撰擇標準ニ依リテ入學セシメタル者ヲ分類スレバ

腺病質 四十六、一般虛弱者 三十、肋膜炎後 十六、肺尖「カタール」後 五、腹膜炎後 二、瓣膜疾患 一、

デアアル。是等ノ兒童ハ平等ニ取扱ヒ決シテ附添ヤ特別待遇ヲ與ヘヌ。

林間學校ハ健康ノ恢復ヲ主眼トナスガ故ニ何レモ課業ヲ輕クシ疲勞ヲ避ケ、個性的ニ導クヤウニシテ居ルガ、大體ノ日課トシテハ朝早く起キ、夜早く寢テ、授業時間ヲ少ナクシテ休息ヲ與ヘ、午前ト午後トニ檢温シテ發病ニ注意シ、夏ハ中食後ニ午睡ヲ課シ、又午前ノ十時ニハ牛乳、午後三時ニハ間食ヲ支給シテ居ルノデアアル。

又私ガ意外ニ感ジ又興味ヲ喚起シタ二三ノ點ヲ舉グレバ

第一ニハ、是等ノ兒童ノ家庭ハ光線ノ射入ガ不充分デアラウト想像シタノニ反シ其大部分ハ光線ノ射入ガヨク、唯六%ノミガ薄暗カツタ事デアアル。

第二ニハ、兒童ノ步行開始ガ定メシ遅カッタラウト想像シタノデアアルガ、平均十六ヶ月一分ト云フ數ヲ得タノデ、生理的步行ガ十二ヶ月乃至十八ヶ月ナノニ比較シテ決シテ遅イモノデハナイト知ツタノデアアル、此二ツノ事ハ私ニ是等ノ子供モ先天的ニ虛弱デアッタノデハナク、生後ノ環境ガ兒童ヲ此所ニ導イタモノデアラウト想像サセタノデアアル。モウ一ツ私ノ考ヲ強メルモノガアル。ソレハ人工營養ヲ以テ養育セラレタ兒童ノ多クガ一般虛弱ノ状態ニ在ルニ拘ラス腺病質ノ兒童ノ大部分ハ母乳ニ依ツテ育テラレタ者デアアルコトヲ知ツタコトデアアル。之ハ結核性母體ヨリ感染シテ所謂結核潜伏ノ状態ナル腺病質トナツテ居ルノデハナイカト思フノデアアル。

次ニ私ハ是等ノ兒童ノ身體ヲ検査シテ五六%ノ扁桃腺腫大、八三%ノ頸腺腫大、六一%ノビルケー氏陽性反應、三四%ノ胸廓異狀等ヲ發見シタ許リデナク、智力方面ニ於テモ或ハ性質、性癖等ニ於テモ著シク改善スルコトガ出來、血壓ノ如

キモ一學期中ニ多キハ二六耗少ナキハ却ツテ三耗ノ減少アリ平均一〇耗宛ノ増加ヲ見タノデアル。

尙ホ之ヲ健康ノ一般的標準タル身長、胸圍及體重ニ就テ述ブレバ、身長ハ標準下五八ヨリ七七ニ、胸圍ハ三九ヨリ七二ニ、體重ハ最モ著シク變化シテ標準下二七ヨリ六〇ニ増進シテ居ル。

尙ホ體重ノミニ就テ調ブルニ入學後三ヶ月ハ最モ著シク増進シテ、入學當時遙カニ標準下ニ在リシ者ガ僅カ三月ニシテ七八歳ノ子供ハ數等標準體重ヲ超過シ、十二三歳ニ於テモ著シク標準ニ接近シ來ルノデアル。

尙ホ一年間ノ増加ハ身長ニ於テ標準一寸五分ナルニ本校デハ一寸九分、胸圍ハ標準ガ七八分ナルニ本校デハ一寸一分、體重ハ標準ガ約五百匁ナルニ本校デハ八百七十八匁ノ増率ヲ示シテ居ルノデアル。而モ此統計ハ今尙ホ改善ノ道程ニ在ル在學者ヲモ含有シテノ計算故、退學者ノミニ就テノ統計ヲ作レバ之ヨリモ遙カニ良成績ヲ示スコトハ明カナ事實デアル。

而シ、是等ノ事實ガ單ニ在學中ノミノ現象デ、退學後其健康ガ再ビ破壞サレル様デハ、林間學校ノ價值モ大ニ減殺サレル譯デアルガ、四十三名ノ在學者ヲ控除シタ者ノ中、二十名ハ中學校或ハ女學校ニ入學シ、二十九名ハ元ノ小學校ニ復歸シ五名ハ家事ノ手傳ヲナシ居リ。殊ニ五名ハ競争最モ劇甚ナル府立中學ニ入學シテ毫モ其健康ヲ損セラル、事ナキノミナラス、兒童總數ノ七十五%マデガ全ク缺席シタクナツタト云フ事實ニ鑑ミテ、私ハ

林間學校ハ虛弱ナル兒童ヲ變ジテ永久的ノ健康者トナスモノデアル

ト結論シタイノデアル。故ニ私ハ林間學校ノ普及ヲ希望スルノデアル。皆サンハ一見甚ダ迂遠ノ如ク見ユル林間學校ガ結核菌培養場タル虛弱兒童ニ對シテ如何ニ著效アルカラ御考慮ノ中ニ措カレテ治子ク林間學校ガ普及シテ虛弱兒童ヲ漏レナク收容スルコトガ出來ルヤウ盡力セラレントヲ希望スル次第デアリマス。

(自抄)

注意スベキ喀血ノ一二

醫學博士 永 井 秀 太君 (東京)

演者ハ四年來實驗セル十三例ノ「インフルエンザ」後ノ小喀血ニ就テ報告セリ、即チ喀血ノ性質稍々特異ニシテ、多クハ透明乃至半透明ノ粘液中ニ血液包裡セラレ血液部ト粘液部ト明瞭ノ區劃アルヲ特徴トシ、多クハ聲咳ニ依ツテ容易ニ喀出セラル、粘液中ニ存スルヲ常トス。

發來ノ時期ハ解熱後一週間乃至二十日ノ後ニシテ多クハ二三日間持續シ、或ハ一日ノ朝二三回ノ血痰ニ止マルアリ、「インフルエンザ」ノ程度ハ甚ダ輕症ニシテ其ノ經過中ニハ血痰乃至喀血ハ斷ジテ無カリシ者ナリ。

男子ニ多ク婦人ニ少ク年齢多クハ二十歳ヨリ五十歳迄ニシテ多クハ平素健康ナル嘗テ醫治ヲ受ケタルコトナキ人々ナリ。

而シテ喀痰中結核菌ヲ證明セズ、打診上變化ナク聽診上時ニ「ラッセル」ヲ聞クノミ初メニハ結核トノ鑑別容易ナラズ、豫後及處置ニ付テ大ニ患者ヲ煩ハスモノアル故ニ、茲ニ非結核性喀血ノ一種トシテ「インフルエンザ」經過後ノ喀血ヲ追加セントス。

次に演者ハ動脈瘤ノ破裂ヨリスル大喀血ニ非ラズシテ周圍肺組織ヨリスル頑固ナル出血ノ一例ヲ報告セリ。

胸部X線像ハ心臟ガ右心位ニ轉位シ脊柱ヲ境界トシテ左胸ハ全部暗黒ニシテ透視スルヲ得ズ、元ヨリ「プルザチオン」ヲ判知スル能ハズ、左胸廓ハ一般ニ強ク緊滿シ、右ヲ打ツガ如キ抵抗アリ、聽診ニ遠ク幽微ニ氣管枝音ヲ聞クノミニシテ何物ヲモ聽取セズ、試験穿刺ヲ至ル處ニ行フニ甚ダ稀レニ時トシテ胸部腫瘍ニ特異ノ陳久出血性ノ暗紅色滲出液ヲ得、此ノ起部ヲ套管針ヲ以テ穿刺スルモ排液スル能ハズ。

診斷ハ諸家ニ依ツテ皆異ナリ、極度ノ肋膜肥厚トスルモノ最モ多ク、肺ノ肉腫、癌、「グンマー」等多端ニ互リ、長キ(二ヶ年半)入院中總テ是等ニ對スル檢索ヲ遂ゲタルモ皆適合シタル説明ヲ下ス能ハズ、結核菌ヲ終始發見セズ、總テ疑

診中ニ「インフルエンザ」ニ依リテ死亡セリ。

剖見スルニ驚ク可シ、人頭大ノ大腫瘍ノ周圍ニ肺組織ハ壓迫セラレテ脆弱ナル組織塊ニ變ジ胸廓内壁ニ強ク癒著セリ、肺ノ上部ハ全ク黑色ニシテ稍々硬キ肉塊ニ變ジ、X線像ノ不透明ナリシヲ解スルニ足ル程度ナリ。

腫瘍ハ緊滿シテ硬キコト人頭ノ如ク、心囊、縦隔竇及胸壁ト硬ク癒著シテ一塊トナリ、之レヲ剝出スルコト能ハズ。

試ミニ一刀ヲ加フルニ厚ク硬キ瘢痕組織ニシテ内部ニ進ムニ從ツテ柔軟トナリ遂ニ黃色脂肪層様ノ物ニ達シテ突然大量ノ血液迸出シ、初メテ動脈瘤ナリシヲ知リタリ。

瘤内部ニハ豚脂様凝血ヲ多量ニ存シ容易ニ手ヲ以テ剝出シ得、其量實ニ中膿盆一杯ニ達シ、其外圍ハ淡褐紅色ノ鬆粗ノ組織ヨリ成リ、漸次外層ニ進ムニ從ヒ褐色度ヲ増シ硬固ノ結締織トナル。豚脂様凝血層ヲ通ジテ約三四糎ノ厚サヲ有シ、容易ニ血液滲透乃至破裂ノ狀況ナキモノナリ。

而シテ生前ノ喀血ハ二三日間休止スルコトアルモ、多クハ毎日連續シテ血液ニ粘膜ヲ混合シテ時トシテ新鮮、時トシテ陳舊ナル血塊ヲ出ス、百方結核性肺出血ニ對スル手段ヲ施シタルモ反應セズ、一年半餘持續シタリ、其間榮養ハ害セラレズ、「カエキシー」ヲ起サバリキ。

肺結核患者ノ喀血ト氣象トノ關係ニ就テ

醫學博士 松 田 毅君 (大阪)

大阪灣ノ和泉線ニ位置スル濱寺ニ於テ過去三ケ年間ノ實驗ニ依ルニ喀血頻度ノ多少ト氣象ノ關係大約左ノ如キヲ見ル、但シ之ヲ更ラニ多數ノ實驗ニ徵セバ或ハ多少ノ異動ヲ生ズルヤモ測ラレズ、他日再ビ報告スルコト、ス可シ。

一、喀血ノ最多キ月ハ氣壓最低ク且ツ濕度最高キノ時季ニシテ當所ニテハ六月ニ相當ス七月、五月、八月ノ順位ニテ之ニ次グ。

- 二、次ハ氣壓ト濕氣トノ變換期ニテ九月、四月、十月トス。
 - 三、次ハ氣壓高、濕度高(但(一)ヨリモ低位)ノ時季ニシテ十一月、十二月之ニ當ル。
 - 四、次ハ氣壓高、濕度低ノ時季ニシテ一月、二月、三月ノ順位トナル。
- 右ノ見地ヨリシテ喀血ニ對スル豫防策トシテ不絶氣象ノ變換ニ注目シ、氣壓ト濕氣ト惡關係ヲ示シ且ツ同時ニ患者ノ血壓高クナリタル時ハ直ニ血壓ヲ下降セシムルノ處置ヲナスニ絶對トハ云ヒカヌルモ殆ド喀血ヲ未然ニ防ギ得ルヲ實驗セリ。

(自抄)

松田君ノ演說ニ對スル附議

醫學博士 檜 林 兵 三 郎 君 (兵庫)

余が過去四ヶ年間ニ於ケル須磨ニ於ケル經驗ニ徴スルニ、喀血ノ頻度ハ須磨局處ニ於ケル氣象ノ變化ニ特ニ關係ヲ認メズ、寧ロ世界的氣壓ノ配置ニヤト感ズ、即チアル所ノ高氣壓ガアル所ノ低氣壓ニ向ツテ將ニ移動セントスル場合ニ於テ多キヲ見ル、是レ或ハ下層氣象ニ特記ス可キ變化ヲ呈スルニ至ラズシテ高層氣象ニ於ケル變化ニ因ルモノニアラズヤ而シテ須磨ニ於ケル喀血頻發月ハ三月下旬及ビ十月上旬ニ於テ存ス。

肺結核患者尿ニ現ハル、「ウロクロモーゲン」反應ニ就テ

熊 谷 安 正 君 (東京)

演者ハ既往二年間東京市療養所收容ノ肺結核患者ノ多數例ニ於テ檢シタル尿中ノ「ウロクロモーゲン」反應ノ成績ニ就テ其統計的觀察ノ大體ヲ述べ、左ノ如ク結論シタリ。

- 一、「ウロクロモーゲン」反應ハ「デアッオ」反應ニ比シ、操作簡易ニシテ且ツ肺結核ノ豫後判定上之ニ優レタル價値ヲ有ス。
- 二、「ウロクロモーゲン」反應ハ重篤ノ肺結核殊ニ滲出性進行性病變ノ際ニ多ク出現ス。
- 三、「ウロクロモーゲン」ノ出現スルヤ概テ豫後數ヶ月ヲ算スベキノミ。
- 四、從テ「ウロクロモーゲン」陽性ノ場合ハ特殊療法ノ效果ヲ期待スルコト能ハズ、且ツコレヲ試ミントセバ特ニ慎重ナル用意ヲ要ス。
- 五、結核療養所ニ於テハ日々ノ檢溫、時々ノ體重測定ガ重要ナル如ク、「ウロクロモーゲン」反應ノ檢出亦時々注目スベキ事項ナリトス。

結核患者ノ血壓ニ關スル知識増補

高 龜 良 樹 君 (廣島)

原著欄ニ載セタル故抄録ヲ省略ス。

高龜良樹君ノ演說ニ對スル附議

醫學博士 松 田 毅 君 (大阪)

盜汗ノ直接誘因ハ末梢血管ノ弛緩即チ血壓ノ低シト云フコトガ主要ナル關係デアルコトハ自分モ全ク贊成スル所デアリマス、ソレハ私共ガ止汗劑ヲ使用スル際ニ有效無効ノ結果ヲ來タス場合ヲ血壓ノ測定ニ依ツテ判斷シ得ル事實ヨリ申スノデアリマス、即チ右ノ藥劑ノ内服又ハ注射ノ場合ニ(約十時間後迄)測リタル血壓ガ漸次ニ昇ル時ハ效果アルモ反對ニ

降ルトキハ多クハ效ナシト云フ末梢血管ノ抵抗増進又ハ其低減スル事實ヨリ判斷スルノデアリマス。

肺結核患者ノ體溫ニ關スル研究

第一報 結核ノ疑アル患者ニ現ハル、輕熱ノ分解説明ニ關スル實驗

醫學博士 穗 坂 與 明 君

龜 田 躰 君 (千葉)

結核ノ疑アル患者ニ現ハル、輕熱(低熱)ハ結核以外ニ種々ノ條件ニヨリテ起ル。演者等ハカ、ル輕熱ヲ分解説明セントシテ種々ナル場合ヲ考究セリ。

第一、坊間ニ賣ラル、檢溫器ハ屢々不正確ナルガ、不正確ナリトセバ其性質(高キカ低キカ)、程度及頻度如何ヲ決定セントシテ標準寒暖計ヲ用ヒテ二〇種一六一本ノ檢溫器ヲ検査セリ。其検査ノ結果ハ次ノ如シ。

高ク誤レルモノ	數
二分迄	四
三分迄	八
四分迄	九二
五分迄	三〇
五分以上	二七

即チ檢溫器ノ凡テハ正確ナラズシテ特ニ高キニ失シ、低キニ過グルモノハ之ヲ認メズ。而シテ遺憾乍ラ外國製ノモノ和製ノモノヲ凌過ス。

第二、體溫測定方法ノ不正確ハ往々輕熱ノ存在スルガ如キ誤リヲ來ス。腋下檢溫ノ場合ニ檢溫器ヲ比較的強ク腋下ニ挿ムガ如クスル時ハ該部筋肉ノ收縮ニヨリ當該腋下ニ體溫ノ上昇ヲ來スモノナルガ、演者等ハ十例ニ於テ此關係ヲ觀察シタリ。試験ノ結果トシテハ何レモ〇・一乃至〇・二度迄ノ上昇ヲ來スモ、僅カニ一例ニ於テ左右差ナキヲ觀タリ。

猶之ト反對ニ腋下發汗ハ體溫ノ下降ヲ來スモノナルガ、八實驗例中ニ於テ一例ニ於テ檢側ニ於テ却ツテ〇・一度高ク、又他ノ一例ニ於テ左右同溫ナルヲ觀、他ノ例ニ於テハ凡テ〇・一乃至〇・四度低キヲ觀察セリ。

第三、體溫測定時間ノ不足ハ腋下發汗ト同様ニ、體溫ヲ低ク現ハスモノナルハ言フ俟タザルガ、演者等ハ數種ノ檢溫器ニ就イテ最高溫度ヲ示スキ時間ニ關シ較詳細ノ實驗ノ爲シ、小型檢溫器ニテハ十五分迄、大型檢溫器ニテハ二十分迄上昇スルモ觀タリ。

第四、健康人ニシテ腋下體溫ノ高キニ失スルモノアルガ、コハ病的體溫上昇ニ非ザルヲ證明センニハ、最モ正確ナル檢溫法タル直腸檢溫法ヲモ行ハザル可カラズ。演者等ハ四例ノ健康人ト十六例ノ結核患者トニ就イテ腋下及直腸檢溫法ヲ比較セシニ、其者ノ差ハ〇・四及〇・五最モ多キヲ占ムルモ、中ニハ一、二度迄ノ差ヲ現ハスモノアルガ、大體ニ於テ一、〇・四及〇・五度ノ差ヲ示スモノ、二、一・〇度近クノ差ヲ示スモノ及〇・二乃至〇・三度ノ差ヲ示スモノトニ大別スルコトヲ得ベシ。然レドモ此決定的ノ結果ヲ得ンニハ尙多數ノ實驗ニ俟タザル可カラズ。

穗坂君ノ演說ニ對スル附議

吉澤 惟雄君（東京）

私ハ結核診斷ニペンツォルト氏直腸體溫測定法ヲ行ヒマシタ際健康者ニテモ食後又ハ歩行ノ後ニハ可ナリノ體溫ノ増加ガアリマシタ。ソレ故直腸體溫ハ少クトモ一定時ノ安靜ノ後ニ測ツタラバ比較的ニ溫度ノ動搖ナイ結果ガ得ラレマスト思ヒマス。

吉澤君ノ附議ニ對スル答

醫學博士 穗 坂 與 明 君

余等ハ直腸檢溫ノ場合ニハ最大ノ注意ヲ拂ヒ、離牀セルモノニ就イテハ體溫測定ハ凡テ食前ニ行ヒ、特ニ三十分ノ安臥後ニ於テ之ヲ行ハシメタリ。

結核菌檢出ヲ目的トスル大衆喀痰檢査ノ一方法

堤 元 齡 君

軍隊ニ於テ逐年増加スル肺結核、胸膜炎ノ豫防上一見健康ノ狀ヲ呈シツ、咳痰中ニ結核菌ヲ保有スル者ノ早期檢出ヲ必要トシ自己ノ研究セル結核菌ノ染色法及集菌法ヲ用キテ大衆喀痰檢査ヲ實施セル方法ヲ述ベントス。

- 一、概テ檢査員二十名ヲ一組トシ滅菌綿栓セル大試験管ニ採痰ス。
- 二、採痰セル大試験管内ニ痰ト同量ノ「Lorenz」氏液(水五〇〇c.c.ニ炭酸曹達七二grヲ溶カシ更ニ「クロール」含量二五%以上ノ「クロール」石灰五四grヲ加ヘ濾過セルモノ)ヲ加ヘ攪拌スルトキハ一五至乃四〇ニテ全ク同質化シ水樣稠度トナル。
- 三、上記痰液ヲ次ノ如ク分注ス。

A、五c.c.ヲ遠心沈降用「スピッツグラス」ニ

B、一〇c.c.ヲ滅菌試験管ニ

- 四、A管ハ約二〇分遠心沈降シ其ノ沈渣ヲ物體板ニ塗抹ス此際特ニ「アンチフォルミン」ノ如ク粘稠液ノ使用ヲ要セズ、
- 五、B管ニハ余ノ考案セル「カルチウム」沈降法(一〇%「クロールカルチウム」五c.c.ヲ加フレバ白濁シ二十時間ヲ經過ス

レバ、管底ニ少量ノ沈澱ヲ生ズ其ノ上清液ヲ經テ沈液ヲ濾紙上ニ傾ケ水分ヲ全ク脱却セシメ其ノ泥狀物ヲ健康者ノ痰ニ混ジテ軟泥狀トナシ物體板ニ塗抹ス）ヲ施シ標本ヲ作製ス。

六、A及B管ヨリ各二枚宛ノ標本ヲ作り其ノ各一枚宛ヲ余ノ考案セル Konrich 氏變法及 Bender 氏變法ニテ染色シ檢査ス。

A. Konrich 氏變法

一、石炭酸「フクシン」ニテ加温二分間染色。

二、水洗。

三、M.A.C. 液即藥局方規定ノ醋酸二分ニ「マラヒットグリユーン」飽和水溶液一分ヲ加ヘタルモノニシテ一分間所置ス。

四、水洗。

B. Bender 氏變法。

一、石炭酸「フクシン」ニテ加温二分間染色。

二、水洗。

三、C.A.P. 液即三%鹽酸「アルコホル」一分ト「ピクリン」酸飽和水溶液一分ヲ加ヘタルモノニテ一分間所置ス。

四、水洗。

(自抄)

結核ノ化學的療法研究

岩 佐 大 治 郎 君 (大阪)

結核ニ對シ銅ガ一定ノ治效作用ヲ有スルハ既ニ多クノ研究者ニ依テ確證セラレタル處ナリ。併シナガラ化學的療法ノ目

的ヲ達スル爲メニハ種々ノ重要ナル要素ヲ具備セザレバ漠然銅劑ヲ用フルトモ其目的ヲ達スル事ハ不可能ナリ。其ノ主要ナル要素トシテハ大略(一)毒性弱キモノ即「オルガノトロップ」ノ傾向少ナク「Inferthanol」ヲツクラズ溶血作用ナク蛋白沈降作用ヲ起サルモノナラザルベカラズ(二)「バクテリオトロップ」ノ傾向大ナルモノ(三)出來得ベクンバ結核毒素ノ中和作用ヲ有スルモノ(四)病竈トノ親和力大ナルモノ等ハ必要ナル要素ナリト信ズ。然レドモ結核ノ如ク血管ヲ缺如シタル病竈ヲ有スルモノニ對シテ化學的療法ノ目的ヲ達センニハ尙其上ニ組織球性細胞ニ攝取セラレ得ベキ銅劑ヲ選定スル事ハ必要ナリト信ズ。余ハカ、ル可能性ヲ有スル銅鹽類ハ膠樣性銅鹽ニ求メザルベカラズト信ジ多數ノ膠樣性銅鹽ヲ製シテソノ内ヨリ前記ノ要素ヲ具備シタルモノヲトル事ニ腐心シ漸ク略是等ノ條件ヲ備フルモノ四種ヲ得タリ。依テ是等ノ銅鹽ヲ用ヒテ結核菌ニ對スル直接作用其ノ他化學的療法ノ基礎的研究ヲ重テ結核動物ニ對スル治療の效果ノ比較試驗ヲ行ヒ興味アル成績ヲ得タリ。銅水溶液ノ結核菌ニ及ス影響試驗ニ於テハ余ノ用ヒタルモノハ銅ノ數十萬倍稀釋液中ニ浸シタル菌モ尙時間ノ經過ニ從ヒ帶綠青色ヲ呈スルニ至ル。此ノ現象ヲ余ハ假ニ結核菌ノ銅攝取ナル言葉ヲ以テアラワサントス。結核菌ノ銅攝取量ハ銅液ノ濃度、種類、及作用シタル時間等ニ因テ異ナリ菌ノ老若ニハ大差ナシ。銅ノ三萬倍稀釋液中ニ浸セル結核菌ハ七十二時間後ニハ全ク抗酸性ヲ失ヒ五日以後ニ於テハ菌ハ崩壞シ始ム。余ノ銅液ヲ作用セシメタル結核菌ノ動物體ニ及ス毒力試驗ニ於テハ強毒菌株ニ二百倍液ヲ四十八時間作用セシメタルモノ及弱毒菌株ニ千倍液ヲ四十八時間作用セシメタルモノハ全ク「モルモット」ニ對シ毒性ヲ有セズ。結核菌毒素ニ對シテハ銅ハ殆んど減毒作用ヲ認メズ。銅化合物ノ血液ニ及ス影響トシテハ余ノ銅鹽ハ血球ヲ溶解セズ血清蛋白ヲ沈降セズ血色素ニ對シ銅五千倍以下ノ稀釋液ニテハ「Inferthanol」ヲツクルコトナシ。動物ニ對スル銅鹽ノ毒力試驗ニ於テハ「クルチン」ニ銅ヲ結合セシメタルモノハ尙毒性強クレドモコレニ一定ノ所置ヲ施シタルモノハ余ノ用ヒタル四種ノ銅鹽中最モ毒性微弱ニシテ家兎ハ「プロキロ」四乃至五疋ノ血管内注射ニ耐ユ。結核罹患「モルモット」ニ對シ前述ノ銅劑ヲ以テスル治療試驗ニ於テハ先ヅ前所置トシテ結核菌ヲ皮下ニ注射シ二週間ヲ經過シ鼠蹊腺ノ腫大ヲ認ムルニ至リテ治療ヲ開始シタルニ「アラビン」酸ト銅ノ化合物ハ毒力尙強ク六頭ノ「モルモット」中五頭ハ早期ニ死亡シ體重モ減少セリ。「スルフオサリチル」

酸ト銅ノ化合物モ亦同様ニシテ六頭中四頭ハ早期ニ死亡シ體重モ減少セリ。酒石酸ト銅ノ化合物ハ六頭中一頭ガ肺炎ニヨリテ斃レタル以外ハ撲殺スル迄生存シタルモ、尙多少銅ノ毒性ニヨリテ體重ハ何レモ減少シタルニ唯「グルチン」ニ銅ヲ結合セシメ一定ノ所置ニヨリテ毒性ヲ減弱セシメタルモノハ六頭中一頭ガ肺炎ニテ早期ニ斃レタル以外ハ皆著シク體重ヲ増加シ、撲殺スル迄生存シタルモノ五頭ノ内三頭迄ハ肉眼的所見上鼠蹊腺ノ中心部ニ乾酪變性物ヲ認メタル外結核菌接種部モ治癒シ其ノ他ノ臟器ニ何等ノ結核性病變ヲ認メズ。他ノ二頭ニハ肺ニ輕度ノ結核病竈ヲ認メ鼠蹊腺ノ中心部ニ乾酪變性物ヲ認メタル外其ノ他ノ部位ニハ何等ノ病變ヲ認メズ。然ルニ肺組織内ニ於テハ葉間結締織、氣管及血管周圍、淋巴組織氣管及淋巴管ノ組織球ハ膠樣性銅鹽ヲ攝取スル事或ハ可能ナラムモ氣胞壁及氣胞中隔ニ於ケル組織球ハ之ヲ攝取スル事不可能ナルベキ筈ナレバ恐ラク結核菌ガ肺組織内ニ侵入スル以前ニ於テ既ニ他ノ臟器内ノ組織球ニ攝取セラレタル銅ノ侵襲ヲ蒙リテ其ノ毒性ヲ消失又ハ減弱シタル爲ナランカト推考ス。全般ヲ通ジテ云ヘバ余ノ用ヒタル銅劑ヲ以テ治療シタルモノハ對照動物ニ比シ其所見上著シク良好ノ成績ヲ得タリ。殊ニ興味アル所見ハ對照動物ノ肝臟ハ著シク結核病變ヲ呈スルニモ拘ラズ余ノ銅劑ヲ以テ治療シタル動物ハ一ツノ例外モナク結核ニ罹患セズ、即チ最モ濃厚ニ銅ヲ貯藏セル肝臟ハ最モ結核ニ罹患シガタキ事實ハ銅ガ結核ニ對シ一定ノ治效作用ヲ有スルヲ立證スルモノナリト信ズ。

(自抄)

岩佐大治郎君ノ演說ニ對スル附議

竹岡三之吉君(鳥取)

余ハ重金屬類ノ結核ノ化學的療法ノ研究ヲナシタル際「コロイダール」金ガ最モ優秀ノ作用ヲ呈シ、銀劑之ニ次ギ銅療法ガ最モ下位タリシヲ實驗セリ、然シテ金劑ニヨリテノ動物試驗ノ結果肝臟ニ於ケル結核ハ八頭ノ内四頭ハ結核ノ結節ヲ殆ンド見出ス事能ハズ、其他ハ輕微ニ侵サレ一頭ノミ強ク侵サレタリ、銀劑ニヨリテノ動物試驗之ニ次ギ銅ニヨリテノ

治療成績ハ肝臟ニ於ケル結核結節ヲ殆ンド見出ス事能ハザリシモノ一頭ニシテ他ハ可ナリ強度ニ侵サレタリ、而シテ其治療方法ハ結核菌ヲ「モルモット」ノ皮下ニ注射シテ二週間ノ後注射ヲ初メテ一週二回宛皮下注射ヲ行ヒテ二ヶ月後試験動物ノ死亡シ初メタルヲ見テ屠殺ノ上比較試験シタリ。

(自抄)

岩佐君ノ演說ニ對スル附議

醫學博士 熊谷謙三郎君(大阪)

唯今岩佐君ノ演說ニ對シテ甚ダ興味ヲ持ツテ居リマス。此ノ場合自分モ注意シ亦同君ニモ參考ニシテ頂キタイ事ハ同君ノ表ヲ拜見シマス。結核感染「モルモット」ニ銅製劑ヲ注射シタ方ハ解剖的變化ハ少ナイガ對照動物ヨリハ凡テ早く死亡シタノデアリマス。然ラバ此ノ試験動物ハ何ニヨリテ早く死亡シタノカト云フ點ニ歸スルノデアリマス。左様私ガ申シマスノハ自分ハ嘗テ結核病機進行ト「ビタミン」Cトノ關係ヲ研究シタル成績ハ「ビタミン」Cヲ少ナクシテ飼養シタ「モルモット」即チ榮養ノ不完全ナ動物ト普通食飼ヲ以テ育テタ「モルモット」トガ何レガ結核ニ重ク感染スルカト云フニ、初メノ豫想ハ勿論榮養不完全ノ前者「モルモット」ガ強キ病變ヲ起スト考ヘマシタニ全ク之レヲ裏切り對照動物ニ比較シテ結核性變化ハ極メテ少ナイノデアリマス(生存日數對照ニ比シ短カシ)。之レヲ以テ見ルト單ニ解剖シタ場合ニ其ノ病的變化ガ少イカラト云フテ必ズシモ變化ノ少ナイ方ガ宜ロシイトハ申サレンノデアリマス。夫レデ結核動物ニ就テ或ル藥劑ヲ注射シテ其ノ解剖的變化ガ少ナイカラト云フテ直チニ其ノ效果ヲ考ヘナサル前ニ尙ホ其ノ動物ノ生活狀態、榮養狀態(體重ノ増減)及生存日數等ヲモ御注意シテ頂キタイ事デアリマス、即チアマリ解剖的變化ニノミ偏シテ捕ハレズニ凡テノ方面ヨリ考案スル事ハ自分等ノ最モ注意シナケレバナラヌ事ト存ジマス。

(自抄)

熊谷君ノ附議ニ對スル答

岩佐大治郎君

早期ニ死亡シタル治療動物ノ多クハ回盲部ニ炎症ヲ起シテ居リマシタ。而シテ重金屬ヲ注射シタル場合多量ニ回盲部ヨリ排泄セラル、事實ヲ考フレバ死亡ノ原因ハ恐ラク銅排泄ニヨリテ腸炎ヲ起ス爲メナランカト推考ス。(自抄)

岩佐君ノ演說ニ對スル附議

醫學博士 榎林兵三郎君(兵庫)

岩佐氏ノ實驗ニ於テ對照動物ニ比シ銅注射動物ノ肝ニ於テ結核ノ稀ナル事ハ大ニ興味ヲ感ズ、余ガ人體ニ於ケル病理解剖上ノ知見ニ徴スルニ肝ニ結核ノ生ズルコト比較的稀ナリ、而シテ先年岩佐氏ノ實驗動物成績ニ因ルニ恰モ人體ニ於ケル臟器ノ結核罹患ノ具合ト一致セルヤニ感ズ、岩佐氏ノ實驗ハ「オルガンヂスボヂチン」ト關係ナキヤ、尙ホ結核ノ起ルコト稀有ナル心、副腎、甲狀腺、脾臟等ニ於ケル所見ヲ承リタシ。(自抄)

榎林君ノ附議ニ對スル答

岩佐大治郎君

私ノ治療試驗ノ成績ハ對照動物ガ一頭ノ例外モナク結核ニ罹患セルニモ拘ラズ、治療動物ノ肝ハ結核ニ罹患セザルノ事實ヨリ推考スレバ、榎林博士ノ御推定ハ少チクトモ此ノ場合ニハ認ムル能ハズシテ、銅注射ニヨリテ罹患セザリシモノト認ム。心臟及甲狀腺ハ檢索セズ。(自抄)

岩佐君ノ演說ニ對スル附議

吉澤 惟雄君 (東京)

私モ嘗テ金ノ「コロイド」ヲ用キテ兔ニテ動物實驗ヲ試ミタ際、大量ノ「コロイド」ヲ以テ處置スルト結節ノ發生數ヲ少ナカラシメタルコトヲ認メタルコトアリ。其際ニハ常ニ肝臟、脾臟ノ結核節ノ所謂組織球ト看做ス可キモノニ「コロイド」ノ沈著物が包入サレ居ルコトヲ見タリ。脾臟ニ此「コロイド」ガ沈著シ眞黒ニナリタルモノヲ海狸ニ接種シタルニ菌ハ生活シテ居リ傳染シタリ。斯クノ如キ所見カラ余ハ重金屬ニヨル化學療法殊ニ實驗的結核ニ對スル效果ハ「エールリッヒ」ノ所謂化學療法ノ機轉ニ對スル考案即「オルガノトロロブ」トイフ意味ニ於テ作用スルモノニアラズ、ムシロ所謂刺戟療法(殊ニ組織球ニ對シ)ノ部ニ入ル可キモノト感ズルナリ。君ノ實驗ハ甚ダ面白キ研究ナルモ其效果ハ以上ノ理由ヨリ如何ニスルモ一定程度以上ヲ出デザルモノナル可シ。サレバ第一ニ其療法ノ無害トイフゴトノ證明ガ常ニ嚴密ナラザル可カラズト思惟ス。

(自抄)

岩佐君ノ演說ニ對スル附議

川村 六郎君 (東京)

昨年 Zeitsch. f. Th. ニ結核ノ化學的療法トシテ沃度「ホルムグアヤコール」ノ有效ナルノ報告アリ、余ハ之ヲ試驗シテ中毒性強ク到底人體ニ應用シ能ハザルヲ知リ「グアヤコール」ニ代ユルニ揮發油ヲ以テシ、二十%沃度「ホルムオイカリッブス」油ヲ以テ動物試驗シタルニ臟器毒性弱ク實際ニ應用シ得ベキヲ知ルト同時ニ、其百倍稀釋液(「オレフ」油ヲ以テ)〇・二坩ヲ以テ結核菌純培養ニ一十坩(五十分一坩ヲ以テ中等大「モルモット」ヲ斃シ得ベキ毒力ヲ有ス)ヲ「モルモット」皮下ニ於テ殺菌スルヲ證明シ、次デ家兔ニ對スル治療試驗ヲ試ミ更ニ患者ニ對シ直接靜脈内注射又ハ筋肉内注射シテ目下

治療中ナリ。

由來沃度「ホルム」ハ其生理的作用最モ化學的療法ノ目的ニ適シ、其動物體內ニ入ルヤ健康ナル組織ニ對シテハ何等分解セザルモ病竈中殊ニ還元性有機小體ノ存スル處ニテハ直チニ分解シ強力ナル滅菌力ヲ有スル沃度水素ヲ分離シ茲ニ當該有機小體ヲ殺菌スルモノトス、從ツテ沃度「ホルム」ハ結核ニ對スル理想的化學療法劑ニシテ將來有望ナリト云フベシ、余ガ臨牀上ノ成績ハ未ダ判明ナラズト雖ドモ目下ノ處略有効ナルガ如ク敢テ追加ス。

(自抄)

岩佐君ノ演說ニ對スル附議

醫學博士 有 馬 賴 吉君 (大阪)

結核ノ化學的治療劑トシテ既ニ知ラレタル重金屬劑殊ニ銅劑ノ最モ不利ナル點ハ結核病竈ニ對スル親和性ノ少ナキト臟器侵害作用ノ強キトニ在リ、岩佐君ノ製劑ハ膠樣化合物ニシテ喰細胞、組織球等ニ好ンデ攝取セラレ、實際結核病竈ニ多ク吸著セラレタルヲ證明スルコトヲ得、且ツ血色素其他ノ體細胞蛋白ト結合スルノ性質著シク弱クシテ、即チ毒性著シク弱キモノナリ、此二點ハ從來ノ結核化學劑ニ比シテ大ナル進歩ナリト見ルベシ。岩佐君ノ研究ヲ化學的療法ト名クベキカ、刺戟療法ト認ムベキカハ意見ノ相違ノミ。

(自抄)

「リポエベン」ノ臨牀上ノ應用ニ就テ

田 中 重 光君 (東京)

演者ハ自己創製ノ「リポエベン」ニ關スル治療經驗ヲ述べ、近時製法改善ノ結果、從前ニ比シテ大量ヲ注射シ得ルニ至レルコト、腸寄生蟲ヲ有スル結核患者ニハ時トシテ腹痛下痢等ヲ起シ、又稀ニハ、輕熱、頭痛等ヲ來スコトアルモ、一時

的ニシテ危險ヲ伴ハザルコト、其他應用上ノ注意ニ三項ニ就キテ説明スル所アリ、最後ニ著效アリシト思惟スル一例トシテ、左足關節ノ結核症ヲ有スル一年八ヶ月ノ少女ニ於ケル經過ヲ報告セリ、即チ局所ニハ何等ノ處置ヲ加ヘズ、唯「リボエベン」十五萬倍液ノ皮下注射ヲ行ヒタリ、其量ハ〇・一五耗ヨリ始メ三日乃至四日毎ニ爲シ、漸次増量シテ〇・五耗ニ至リ、八ヶ月間四十五回ノ注射ノ後、機能障礙又ハ畸形ハ殆ンド殘サズニ治癒シタリト。

「ヴキタミン」A及「エルボン」ヲ肺結核患者ニ試ミタル臨牀所見

牛 島 保君（東京）

「ヴキタミン」Aヲ肺結核患者ニ試ムレバ食欲増進ヲ來シ約一ヶ月ニシテ營養ノ恢復スルヲ認メ、從來肉食ヲ嫌ヒシモノモ肉食ニ堪ユルノミナラズ、却テ之ヲ要求シ脂肪食ニテ下痢セシモノハ下痢止ミ、却テ便秘ヲ訴フルモノアリ、アル輕症者ニ於テハ二ヶ月ニシテ二疝ノ増加ヲ認メタリ。

「ヴキタミン」A及「エルボン」ニテ解熱シ低キニ滯留スルカ或ハ漸次ニ解熱スルハ豫後多クハ良ナルモ、「エルボン」ノ效消失スル頃ニハ反動ヲ以テ上昇シ弛張極リナキハ豫後不良ニシテ死期モ近シ、之レ困難ナル肺結核豫後決定ノ參考ニナル可シ、カクノ如ク「エルボン」及「ヴキタミン」Aニヨリテ影響ヲ受ケザルモノ無ク、崩レザル熱型ナシ、「ヴキタミン」Aト「エルボン」トハ共同シテ強力ノ解熱作用ヲ呈ス。

輕微ノ熱ハ「ヴキタミン」Aノミニテ消失シ他ニ何物モ要セズ。

結核以外ノ原因ニヨル發熱ニハ奏效ヲ見ザリシ、病竈ニ對シテハ早キハ二週間遅クモ三週間デ「ラッセル」ノ減退ヲ認メ輕症ハ容易ニ消失スルモ重症ハ長時日ヲ要ス可シ。

喀痰ハ膿性ノモノ多量ニ出スモノモ漸次ニ減少シ甚ダシク濃厚粘稠トナルコトアリ。

結核菌ノ排泄ニハ影響ナキガ如シ。

榮養恢復ト共ニ呼吸困難ハ除去サレ盜汗モ漸次減少ス。

心臟ニハ一週間前後ニシテ脈搏ノ緊張良クナルヲ氣附ク可シ。

血壓ハ上昇スルガ如キニモ拘ハラズ治療約三ヶ月ニ至レバ喀血ヲ殆ド見ズ。

「ヴキタミン」Aノ適當量ヲ與フレバ四肢ニ溫暖ノ感ヲ生ズ。

「ヴキタミン」Aヲ衰弱セル患者ニ突然大量ヲ與フレバ眩暈ヲ訴フルコトハ注意ス可キナリ。

「ヴキタミン」A適當量ハ個人ニヨリテ異ナリ六粒ガ適當ノモノアレバ十二粒ノ適當ノモノアリテ其量ハ加減ヲ要シ多量ヲ與フレバ却テ食慾ノ減退ヲ來スコトアリ。

以上ノ外ニ從來ノ對症療法及衛生事項ノ必要ナルハ勿論ナリ。

牛島氏演說ニ對スル討論

醫學博士 檜 林 兵 三 郎 君 (兵庫)

「ヴキタミン」A「エルボン」ヲ併用セザレバ效ナシトノ御考ナリヤ。

余ハ六例ノ結核病者ニ就キ「エルボン」、竝ニ「ヴキタミン」Aノ單獨竝ニ並用實驗ヲ行ヘリ、内四例ノ重症、有熱、肺結核患者ニ於テハ食慾増進又ハ解熱效果ヲ認メズ、而モ一ヶ月半乃至二ヶ月間ニ到リテ使用セリ、反之、微熱、輕症者殊ニ頸部、腋窩部、腸間膜等ニ於ケル淋巴腺結核ヲ主トシテ有シ如何ナル方法ニヨリテモ體重ノ漸減ヲ來セルモノニ於テ「ヴキタミン」A(六粒)使用後數日ニシテ多少ノ下解(最高三七・四位ノモノガ三七・二トナル)及ビ食慾増進ヲ來シ、體重モ亦一週間毎ニ〇・三乃至〇・六盪ノ増加ヲ來セルヲ知レリ。

吾人ハアル種ノ結核有熱患者ニ於テ一定期間ノ「エルボン」單獨使用ノ後ニ於テモ亦下熱竝ニ胸部ノ他覺的症狀ノ輕快スルモノアルヲ注意セザル可ラズ。

(自抄)

檜林君ノ附議ニ對スル答

牛 島 保君

「ラッセル」ハ三週間ニ減リ初メ榮養ハ一ヶ月位デ恢復ヲ認メマス。
熱ナキモノニハ「エルボン」ノ要ナシ。

一種奇異ナル高山植物ヨリ製出セル最新結核治療藥「フチリジン」ノ發表

醫學博士 名 古屋 長 藏君（東京）

演者ハ或高山植物ヨリ製出セル「フチリジン」ナル物ヲ結核治療藥トシテ報告シ、其藥品ヲ供覽シタリ。

「アンチモルビン」ヲ使用シタル肺結核患者ノ「レントゲン」像供覽

平 野 治君

「アルチモルビン」ヲ靜脈内ニ注射シタル一肺結核患者ノ治療例ニ就テ、注射前後ノ「レントゲン」像ヲ比較供覽セリ。

肺結核空洞内注射ノ方法

高 田 畊 安君（東京）

演者ハ一昨年四月以來實行セル肺結核患者空洞内注射療法ヲ説明シ患者ヲ供覽セリ、其方法ハ左ノ如シ。

(一)準備スベキ器具及藥品ハ、(イ)ブラワッツ氏注射器 (ロ)五坵入血清注射器 (ハ)「ピンセット」 (ニ)三%「リゾール」水ヲ含メル綿花 (ホ)沃度丁幾 (ヘ)酒精 (ト)精製綿花 (チ)「ゴム」硬膏 (リ)注射藥液 (ヌ)三%「リゾール」水其他手指消毒用具。

(二)患者ヲ空洞側ヲ上ニシテ横臥セシメ沃度丁幾ヲ肺尖峽ノ注射部ニ點滴ス、次ニ聽診器ノ胸端ノ狭キ方ヲ肺尖峽部ニ接シテ注射部位ヲ選定シ(銳利氣管枝音及有響水泡音アリ)、更ニ展伸セル小指ノ尖ヲ注射部ニ接シ豫メ象牙及鯨鬚製ノ叩診槌ヲ以テ同指ヲ砧トシ叩診シテ空洞ヲ確認ス(鼓音及キントリッヒ氏音調變換ニ由ル)。

(三)注射針ノ刺入ハ極メテ慎重且徐ロニ胸壁縱軸或ハ前胸壁ニ竝行ニ行ヒ、一・五乃至二糎ニシテ空洞ニ到達シタリト感ズル時ブラワッツ氏注射筒ヲ空針ニ接合シ空氣ヲ注入シテ針尖ガ空洞ニ達セルヲ明カニシ然ル後藥液ヲ容レタル血清注射器ヲ空針ニ接合シ徐カニ藥液ヲ注射ス。

注射後ハ空針ヲ拔キ去リ「ゴム」硬膏ヲ貼附ス。

(四)注射後三日間ハ安靜ヲ守ラス但シ徐行ヲ妨グズ。本法ハ無痛ナルヲ常トス。若シモ疼痛或ハ壓迫感或ハ上肢ニ放散スル異常感等アレバ正キ空洞内注射ナラザリシ證徴ナリ。

(五)注射藥液ハ慎重研究。現今ハ左方ヲ賞用ス。

(甲液處方)

沃度「フォルム」

一・五

「テレピン」油

五・〇

「カンフェル」

五・〇

「オレフ」油

二八・五

(乙液處方)

「カンフェル」

五・〇

「オレフ」油

四五・〇

制菌性及刺戟性ハ甲液ニ多ク乙液ニ少ナシ、故ニ病症ニ應ジテ別々ニ注射セシコトモアルガ、現今ハ之ヲ等分ニ和シテ注射ス、用量ハ甲乙液各〇・五坵ヨリ始メ、病狀ニ應ジテ或ハ同量ヲ反復シ或ハ各〇・五坵ヅツヲ增量シテ等分液五・〇

耗ニ達ス、又回数ハ一週一回或ハ二週一回。若シモ刺戟症候發生持續セル時ハ更ニ久シク再注射ヲ延期ス。

結核感染門トシテノ扁桃腺(豫報)

青 山 敬 二 君 (大阪)

演者ハ扁桃腺ガ結核ノ感染門トシテ如何ナル意義ヲ有スベキカヲ知ラントシテ實驗セル所ヲ報ジ且ツ標本ヲ供覽セリ。

(自抄)

青山君ノ演說ニ對スル附議

醫學博士 檜 林 兵 三 郎 君 (兵庫)

余ハ明治四十四年滿洲ニ於ケル肺「ペスト」大流行ニ際シ人體屍三十六體ノ剖檢例中唯一例ノ扁桃腺「ペスト」ヲ經驗セリ。而シテ其ノ組織的所見ニ於テ「ペスト」菌ハ先ヅ上皮ヲ通ジテ上皮下組織腔ニ入り此ノ部ニ於テ發育増殖シテ該部ノ壞死ヲ來ラシメテ一方深部ニ及ビ他方又次デ上皮ノ剝脫ヲ來セルヲ知レリ、更ニ顎下淋巴腺、氣管周圍ノ淋巴腺ノ腫大シ遂ニ肺門部ニ病變ノ始メテ起レルヲ知レリ。

消化セル「アルコホル」不沈舊「ツベルクリン」成分及「ビタミン」

A、肝油ノ海獺結核ニ及ボス影響

吉 澤 惟 雄 君 (東京)

余ハ既ニ數回報告セルガ如ク(一)海猿結核ノ進行、(二)結核竈ニ於ケル酪變及(三)結核竈ニ於ケル細胞障得作用(壞死)ノ三者ヲ目標トシ、種々ノ想定的「ツベルクリン」成分ヲ連續的ニ注射シ、之ニ如何ニ作用スルヤヲ實驗シ。大體次ギノ如キ結論ニ到著スルコトヲ得タリ。即所謂「ツベルクリン」反應ヲ起ス成分ハ以上三者ヲ抑制スル能ハズ、時トシテ助長スルカノ如ク見ユル場合アリシモ、「ツベルクリン」中ノ此ノ反應成分ヲ「バンクレアチン」及「アルコホル」ノ兩者ニ由リ除去セルモノハ確實ニ一定度迄前記三者ヲ抑制シ得。而シテ「ツベルクリン」ニ「アルコホル」(九五%)ヲ三倍量加ヘ沈澱物ヲ除去シ上清即「アルコホル」ニ由ル不沈成分ヲ採取シテ後「アルコホル」ヲ除去シテ之ヲ「バンクレアチン」ニテ消化シ其中ニ殘存スル「ツベルクリン」反應物質ヲ出來ルダケ除去シタルモノハ今迄ノ實驗ニ使用セル種々ノ材料中最モヨク此作用ヲ發揮シ得。而モ此作用ハ「ツベルクリン」中ニ含有スル「グリスリン」又ハ「ブイヨン」成分等ニ由ルコトナシ而シテ更ニ之ヲ人體ノ狼瘡、狼瘡性潰瘍、疣狀皮膚結核、バザン氏硬結ヨリ出發セル皮膚ノ結核性潰瘍、小ナル腺病性潰瘍ニ應用シ癩痕形成ヲ以テ治癒セルヲ認メ、紅彩ノ粟粒大結節ニ應用シ其消失セルヲ認メタルモノアリシガ故斯クノ如キ結核病變ニハ治癒的ニ作用シ得ル場合アリタリト斷言シ得可シ。而シテ此者ハ補體結合性抗原トナリ得ザリシガ故其作用ノ説明ハ甚ダ困難ニシテ彼ノバイル氏ノ曰ク「アンチアグレンシン」ヲ造ルモノナリヤ又ハ一種ノ刺戟ニ由リ此作用ヲ呈スルモノナリヤ未ダ推論ス可キ充分ノ根據ナシ。

余ノ今回ノ實驗ハ肝油「ビタミン」ガ此作用ニ如何ニ影響スルヤヲ知ラントセルナリ。使用セル肝油ハ日本藥局法肝油ニシテ其數滴ニ硫酸一滴加フルコトニ由リ紫色ヲ呈シ長ク放置スル時ハ黑褐色トナリ行クモノヲ用キタリ。

「ビタミン」ハ物理化學研究所ニ於テ高橋氏ガ肝油ヨリ分離シ「オリーブ」油ニ溶解セシメタルモノナリ。肝油及ビ「ビタミン」ヲ擇ミタル理由ハ肝油ハ古クヨリ結核性乃至腺病質性ノ疾患ニ一定ノ好影響アルコトハ確實ニシテ高橋氏製ノ「ビタミン」ハモ同様ナル作用ヲ呈セシムルヲ得ルコトハ臨牀上恐ラク事實ナル可ク想像セシメラレタルガ故ナリ。

實驗方法ハ二十四疋ノ海猿ヲ選出シ型ノ如クレーメル氏皮内反應ヲ檢シ陰性ナルコトヲ確カメ、生活力、體量等ヲ對照ト大差ナカラシメ。飼育ニモ全ク同様ノ狀況ニ置カシメタリ、而シテ之ヲ六疋ツ、四組ニ分チ人型結核菌ノ生活力ノ旺

盛ナルモノヲ、二分ノ一及十分ノ一ニ疔宛、腹部ノ臍窩上一糲ノ個所へ正確ニ皮下ニ接種セリ。而シテ第一組ニハ肝油ヲ最初ハ毎日、後ニハ二、三日間ヲ隔テ、皮下ニ注射シ後ニハ所謂高橋氏ノ「ビタミン」Aヲ注射シタリ第二組ハ其外更ニ結核菌接種後三日ヨリ上記「ワクチン」ヲ〇・五疔宛ニ日又ハ三日又ハ一週間置位ニ注射シ、第三組ハ肝油及「ビタミン」ヲ注射セズニ「ワクチン」ノミヲ注射シ第四組ハ無處置ノ對照トセリ。

其後約二ヶ月ニテ殺シ解剖セリ。

其結果ハ、結核ノ進行、結核菌ノ酪變乃至細胞破壞作用ノ三者ヲ目標トシテ調査スル時ハ肝油及「ビタミン」A注射ノモノハ對照ト大差ナク「ワクチン」ヲ注射セルモノハ前者ト共同シテ注射スルモノ單獨ニ注射スルモノ對照ニ比シ明確ニ前記三病變ヲ抑制スルコトヲ認メ得タリ。

但シ「ビタミン」及肝油ヲ注射セルモノハ一般ニ解剖ニ際シ淋巴腺ガ硬クナリ組織學的ニ多少結締織ガ結核菌ニ増殖シタルヤノ感ジヲ與ヘタリ。終リニ注意トシテ述ブ可キハ實驗ノ推論ヨリ「ビタミン」A及肝油等ガ人體ノ結核ノ進行ニ好影響ヲ與フルコトヲ否定スルモノニアラザルコトニシテ何ントナレバ此種ノモノ、作用ノ研究ハ主トシテ臨牀上ノ實驗ニ由ラザル可カラザルモノニシテ海獺結核ノ病理ト人體結核殊ニ肺結核患者ノ病理トハ大ニ異ナリタルモノアルハ今日更茲ニ述ブルヲ要セザル程度ノモノナレバナリ。

(自抄)

「ツベルクリン」皮膚接種ノ結核海獺ニ及ボス影響

醫學博士 今村 荒男君

仲田 一信君

舊「ツベルクリン」ヲ皮膚ノ亂切面ニ接種シ皮膚ニ「ツベルクリン」炎衝ヲ起サシメ、之ニ由テ海獺ノ結核菌ニ及ボス影響ヲ研究セリ。

海狸七十頭ニ夫々十分ノ一、百分ノ一、五分ノ一、千分ノ一、五千分ノ一、或ハ一萬分ノ一ニ生人型結核菌ヲ皮下ニ接種シテ罹病セシメ三週間ヲ經タル後ニ「ツベルクリン」皮膚接種ヲ約半數ニ行ヒ半數ヲ對照セリ。
海狸ノ皮膚ノ幅二糲長四糲ヲ接種面トシ之レニ亂切ヲ行ヒ舊「ツベルクリン」二滴ヲ塗擦セリ、此ノ如キ皮膚接種ヲ二或ハ三週間ノ間隔ニテ五、六或ハ七回行ヒタル後對稱ト同時ニ殺シテ其四十三頭ニツキ肉眼的及顯微鏡的ニ病竈ヲ檢セリ。

結核菌ノ所見ハ對照ニ比シテ差異ナシ、病竈ハ大體ニ於テ對照ニ比シテ著シキ差異ヲ認メズ「ツベルクリン」接種ヲナセルモノニモ病竈ノ著シキモノアリ、對照ニ於テモ病竈ノ輕キモノアリ、兩者ノ間ニ一定ナル明確ノ差異ヲ認ムル能ハズ。然レドモ脾臟ノ平均重量ハ對照ノ其レヨリモ輕ク、病竈ニ於ケル結締組織ハ對照ニ比シテ幾分多キ感ヲ抱カシムルモノアリ。「ツベルクリン」皮膚接種ニヨリテ起リシ障礙トシテ明ナルモノナシ。

要スルニ此實驗ニヨレバ、皮膚ノ「ツベルクリン」炎衝ノ場所ニ於テ結核菌ニ對シテ有力ナル免疫物質ガ發生スルト云フポンドルフ氏ノ說ハ信ズル能ハズ。
(自抄)

結核免疫竝ニエリトロジン、ツベルクリンニ就テ

醫學博士 渡邊 義政君 (東京)

原著欄ニ載セタル故抄録ヨリ省略ス。

人型死結核菌ノ生結核菌接種ニ對スル免疫作用

(二三動物ニ於ケル比較研究)

南 廣 憲君 (大阪)

人型結核菌ニ對シテ感受性强キ海獺家兔竝感受性弱キ(即チ抵抗力強ク且ツ寧ロ自然免疫ニ近キ)犬、山羊等ノ四種動物ニ對シ人型死結核菌ヲ一定ノ間隔日數ヲ置キ、規則正シク靜脈内ニ反復注射ヲ行ヒ、之レニヨリテ各種動物ニ過敏反應ヲ催起シ、且ツ之レニ伴フ免疫程度ヲ測定センガ爲メニ、先ヅ注射直後ノ過敏症狀竝注射後ノ過敏反應熱ヲ觀察シ、且ツ凝集反應ヲ測定シ、而シテ是等ノ一次の免疫操作ヲ行ヒタル四種動物ニ對シ、第二次のニ人型生結核菌ノ皮下竝靜脈内注射ヲ行ヒ、其ノ第一次の免疫操作ガ果シテ如何ナル程度迄奏效スベキカラ研究シ、而シテ亦該四種動物間ニ固有ナル先天的素質ニ由來スル免疫性ノ差異ヲ比較シ、以テ結核免疫ノ本態ヲ明カニスルノ資ニ供セント欲シ本實驗ヲ行フ、先第一ニ死結核菌ノ靜脈内反復注射ヲ行フ時ニ四種動物ハ如何ナル反應ヲ來スカト云フニ。

(一)全動物ハ注射毎ニ血清内、結核凝集素發生ノ増率ヲ示シ、毎注射約二十倍乃至六十倍位ノ増率ヲ以テ上昇シ、前後五回ノ注射ニ由リ犬ノ如キハ三百二十倍迄ノ高率ヲ證明ス。

即チ抵抗力大ナル動物ハ凝集素發生率弱キモノニ比シテ大ナル結果ヲ示シ其ノ順位ハ左ノ如シ。

犬、山羊、家兔、海獺

(二)又過敏反應ニ關シテハ注射直後ニ於ケル過敏症狀ハ、犬、山羊等ノ如キハ注射最中ニ於テ業ニ既ニ急劇且ツ高度ナル症狀ヲ呈シ、此ノ際所謂過敏症狀ノ完全ナル諸症狀ヲ呈スルモ、恢復迅速ニシテ多ク二、三分乃至五分間以內ニ於テ外觀上ノ復舊ヲ來スルニ反シ、海獺、家兔等ノ如キ同症ノ發現甚ダ不完全ニシテ辛ジテ全身ノ倦怠呼吸困難ノ二、三ヲ觀察シ得ラル、ニ過ギス。

要スルニ此ノ現象ノ度合モ亦凝集反應ノ結果ニ一致シタル結果ヲ示シ犬、山羊、家兔、海獺ノ順位ヲ示ス。

(三)然レドモ四種動物ヲ通ジ注射其ノ回ヲ重スルニ從ヒ過敏反應ノ輕症ヲ來シ、殊ニ注入直後ニ於ケル過敏症狀ノ如キハ非常ナル輕減ト迅速ナル恢復ヲ來スモノナリ、殊ニ山羊、犬ニ於テ然リ、又同動物ヲ通ジ熱反應ノ持續時日モ非常ニ短縮セラレ最初ノ反應熱持續日數ハ五日目ニ於ケル發熱持續日數トヲ比較スルニ優ニ二日乃至三日間ノ短縮ヲ來スモノナリ。

如斯死菌免疫操作ヲ反復スルニ從ヒ過敏反應熱ノ輕減セラレ、ハ明カニ結核免疫ノ本能ニ向ヒ深キ意義アルモノナルベシ、即チ免疫體ノ構成弱キニヨリ次回注入毒素ヲ分解無害ノモノトスルコトノ機轉容易リナリシニアラザルカ、又四種動物ヲ通ジ諸反應ニ如斯基差異アルハ動物間ノ結核ニ對スル固有ナル先天的差異アルコトノ明ナル證ヲ示スモノナリ、如斯自然抵抗ナル犬、山羊ハ抵抗力弱キ家兔、海狸ヨリモ免疫體發生機轉旺盛ニシテ、且ツ毒素過敏反應モ亦急劇且ツ強烈ニ現ハル、事實ハ現今ノ學說ト一面相容レザルガ如キ點ナルモ、此ノ不可解ナル點ニ大ナル眞理ノアルモノト思ハル

(四)次ニ如斯基免疫反應ヲ有スル四種動物ニ對シ、第二次的ニ生結核菌ヲ皮下(竝靜脈内)ニ注入セルニ家兔ハ今日尙試驗中ニ屬スル故不明ナルモ海狸ニ到リテハ對照動物ニ比較シテ死ノ轉機ヲトル迄ノ生存日數ハ平均一ヶ月乃至一ヶ月半以上ノ延長ヲ得タリ

即チ一程度迄ノ死菌免疫ガ確實ニ生命ノ延長ヲ來タセルコトヲ證明ス、顯微鏡的差異ニハ大ナル變化ヲ認メザリキ但シ共ニ結核性ノ變化ハ良性ニシテ滲出性ノ傾向ナシ

(五)山羊ハ皮下ニ生菌接種ヲ行ヒタルモノヲ對照ト比較スルニ、免疫動物ハ其ノ注射部位ハ皮下ニ乾酪變性ヲ來セドモ、大部分潰瘍ヲ形造ルコトナク、日ト共ニ硬ク大サモ逐次縮小セラレ、周圍ニ結締織ノ増殖ヲ來シタル感ヲ呈シ、其ノ接種部位ノ鼠蹊腺モ精々雀卵大ニ達スル程度ノモノナルモ、對照ニ到リテハ既ニ接種後二週間位ニシテ潰瘍形成ヲ來シ、乾酪物質ヲ露出シ、接種部位ノ鼠蹊腺ハ非常ニ大キク、注入後約百日目ニ於テ最大ニ達シ、大約十燭光ノ電球大ニ増大シ、全キ乾酪變性ニ陥レリ。

解剖的所見トシテ、免疫獸ノ接種部位ハ中心ニ乾酪變性部ヲ貼シ、其ノ周圍ハ結締織ヲ以テ圍繞セラレ、鼠蹊腺ノ如キハ剪刀ニテモ尙切り難キ程硬キ纖維性變性ヲ來シ、少シモ乾酪變性ヲ見ズ、對照動物ハ解剖的接種部位ノ鼠蹊腺同様縮小シ、鶏卵大ニ達シ、立派ナル乾酪變性ヲ來セリ、顯微鏡的ニハ肝臟ノ著變ヲ第一トシ、即チ對照ハ肝小葉ノ周邊部殊ニグリッソン氏「シユイデ」ノ處ヲ主トシ、結締織ノ増殖ヲ來シ、肝臟硬變ノ初期ノ像ヲ呈シ、尙肝細胞ノ諸處及ビ中心

靜脈ノ壁ヨリ内邊ニ向ヒ進行セルガ如キ像ヲ呈セル主トシテ小淋巴細胞ノ集團ヲ見ラレ(尙少數ノ上皮様細胞ヲ混ズ)然シ免疫獸ニ在リテハ内邊ノ結締織ノ増殖像ヲ見ズ、多クハ單ニ同一部位ニ於ケル小淋巴細胞ノ集團像ヲ示スニ止ルナリ(犬、山羊ハ注入セル生結核菌ノ量ニテハ死ナザル故ニ殊ニ接種後比較的短キ時間以内ニ起ル兩者ノ比較ヲ研究セント欲シ麻醉死ニ陥ラシメタルモノナリ)

カクノ如ク、兩獸間ニ顯著ノ差異ヲ來スハ畢竟免疫ノ相當重大ナル役目ヲナシタルコトヲ意味スルモノナルベシ。
(二)犬ハ對照モ免疫獸モ接種部位ハ約十日間位ニテ潰瘍ヲ形造リ注射部位ノ鼠蹊腺ハ共ニ乾酪變性ニ陥リ、對照ハ腸間膜腺、肝門腺乃至ハ肺臟ニ迄立派ナル數個ノ乾酪變性像ヲ示セドモ、免疫獸ハ精々接種部位ノ鼠蹊腺ノ二、三ノ乾酪變性ヲ見ルノミニシテ對照程高度ノ結締織増殖ヲ見ズ、

肝臟ハ對照動物ノ如ク小葉内邊ニ高度ノ結締織ノ増殖ナク脾臟ニ至リテハ對照ノ如キ乾酪變性像ヲ認メズ。
要之犬、山羊共ニ免疫動物ト對照動物トノ各方面ヨリノ觀察像ハ格段ナル差異ヲ示シ血清内凝集價ノ多キト注入後過敏反應熱持續時間ノ短縮セルコト等ガ全身免疫ニ重大ナル關係ヲ有スルコトヲ想像セラレ、尙研究ノ歩ヲ進メ免疫ヲ反復繰リ返スニ於テハ以上ノ事實ヲ一層劃然ト證明スルニ至ルナラン
(自抄)

結核豫防接種ノ研究(家兔)

醫學博士

太 繩 壽 郎 君

有 馬 賴 吉 君 (大阪)

青 山 敬 二 君

原著欄ニ載セタル故抄録ヲ省略ス。

結核豫防接種ノ研究(「モルモット」)

醫學博士

青山敬二君
有馬頼吉君(大阪)
太繩壽郎君

茲ニ報告スルハ、種々ノ經驗上立案セラレタル方式ニ係ル實驗ノ結果ナリ。

實驗方法。

一、試獸ハ凡テ「モルモット」ニシテ、四群十三組百六頭ヨリ成ル

一、豫防接種苗ハ左ノ三通リノモノヲ用フ。

(イ)人型結核菌、刀根第二十五號、「サボニン」培養「リバーゼ」處置乳劑(以下之ヲAOト假稱ス)製後一ケ年貯藏セモノ。

(ロ)同右、四ケ月貯藏ニ係ルモノ。

(ハ)消毒人型結核菌、刀根第二十三號株普通培養乳劑製後一ケ年貯藏ノモノ。

右三種乳劑中(イ)及ビ(ハ)ハ恐ラクハ自然死ノ状態ニ在ルカ然ラザレバ僅カニ生存力ヲ維持スルモ培地上ニ發育スル餘力ナキモノナリ。(ロ)ハ生存セル事確實ナリ

一、豫防接種間隔ハ二週トシ、第四群第三及ビ第四組ノミハ試獸配列ノ都合上、一部ハ四週ノ間隔ニ於テ行ハレタリ。

一、豫防接種回数ハ第二群及第三群竝ニ第四群中ノ第二及ビ第三組ハ三回、第四群第一組ハ四回、同第四組ハ二回トス。接種ハ腹壁皮下ニ行ハル。

一、豫防接種菌量

第二群(普通乳劑、前記(ハ)苗)

第一組 〇・〇〇二瓩、 〇・〇二瓩、 〇・一瓩、

第二組 〇・〇二瓩、 〇・一瓩、 〇・五瓩、

第三組 〇・一瓩、 〇・五瓩、 一・〇瓩、

第三群(新鮮^{AO}苗、前記(ロ)苗)

第一組以下第三組マデ、右第二群ニ於ケル菌量ニ準ズ、

第四群(AO苗、新古併用)

第一組 古苗 〇・二瓩、 一・〇瓩、 新苗 〇・一瓩、 〇・五瓩、

第二組 古苗 〇・二瓩、 一・〇瓩、 新苗 〇・五瓩、

第三組 古苗 一・〇瓩、 新苗 〇・一瓩、 〇・五瓩、

第四組 古苗 一・〇瓩、 古苗 〇・五瓩、

一、感染接種苗トシテハ、中等ノ毒性ヲ有スル人型菌、刀根第十號株ヲ用フ。

茲ニ感染接種苗トシテ、特ニ豫防苗タル前記二種ノ菌トハ別株ナル第十號ヲ選ビタル所以ハ、所謂自家「ワクチン」實驗ニ墮セザラントスル用意ニ基ク。

一、感染接種ハ、豫防接種完了後五週ヲ經テ、即チ免疫日數、最初ノ豫防接種ヨリ起算シテ多クハ六十七日、一部ハ八十四日目ニシテ、各組ノ二頭宛ヲ撲殺剖見シテ、豫防接種ニ因ル感染無キヲ確メ乃チ前記感染苗〇・〇〇一瓩ヲ試獸全部ニ向テ其腹壁皮下ニ施セリ。

一、右感染接種量ガ健獸ニ如何ノ毒力ヲ有スルヤヲ檢定シテ對照トナサンガ爲メ、第一群十六頭ノ「モルモット」ヲ用ヒタリ。

一、試獸ハ感染接種後斷エズ體重ヲ測定シ、一般状態ヲ觀察シツ、滿五週、十週及ビ二十一週ヲ經テ各組ヨリ一定

數宛之ヲ撲殺シ剖檢精査セルガ、中途斃死セルモノハ其都度剖檢セリ。

成績概念

第一群(感染苗毒力檢定)

接種後五週ニ於テ、右接種局所皮下ニ著シキ乾酪樣變性ヲ伴フ病竈ヲ生ジ、且ツ鼠蹊腺ハ著明ニ腫脹シ、乾酪樣變性ニ陥レリ。尙少數ニ於テハ既ニ肺又ハ脾ノ侵サル、モノアリ、或ハ後腹膜腺等乾酪樣變性ヲ伴ヒテ腫脹セルモノアリ。右ノ病變ハ十週ニ及ンデ一層著明ニ現ハレ、二十一週ニシテ撲殺セル獸ニ於テハ更ニ蔓延増強シ、就中脾臟ハ著シク腫大シ、密發セル結核節ニ因ツテ覆盆子樣外觀ヲ呈スルモノアリ。肺ノ病變從ツテ増進シ且ツ肝腎等ノ侵サル、モノヲ見ル。

第二群(弱毒株普通乳劑一年後ノ免疫力)

豫防苗ニ因ル感染ヲ認メズ

感染苗接種局所及ビ部位腺ノ病變ハ五週、十週ニ於テ著明ナリシモノアレ共、第一群(感染苗毒力對照)ニ比シ明カニ輕度ニシテ、而モ癩痕治癒ヲ示セルモノ少カラズ。且二十一週撲殺獸ニ於テハ右ノ個所ニ病變ヲ貽スモノ稀ニシテ若シ有之トスルモ甚ダ輕度ナリ。大多數ハ肺脾其他ニ病變ヲ有スルモ其程度第一群ニ比シテ概シテ輕ク、稀ニ對照ト殆ンド選バザル病變ヲ有スルモノアリシモ、而モ一二ノモノハ全ク病變ヲ有セザリキ

第三群(四ヶ月貯藏ノ免疫力)

豫防苗ニ因ル病變ハ極メテ微弱ニシテ、接種局所ニ粟粒乃至米粒大ノ小乾酪樣塊ヲ貽スカ、稀ニ脾臟ニ肉眼ヲ以テ辛ジテ發見セラル、極小灰白點一兩個ヲ存スル程度ニ過ギズ。其他鼠蹊腺ノ腫大スルモノアレ共、多クハ癩痕樣硬度ヲ呈シ且ツ之ヲ切斷スルモ乾酪樣塊ヲ容レズ。

感染接種ヲ受ケタル動物ノ病變ハ概シテ稱スルニ足ラズ、感染接種局所ニ病變ヲ貽スハ一小部ノモノニ過ギズ且ツ部位腺腫脹アルモ大多數ハ癩痕狀ヲ呈ス。肺及ビ脾ノ病變ハ時ニ之ヲ見ルモ其程度タルヤ多クハ肉眼ヲ以テ確認シ難キ迄ニ

輕微ナリ。肝腎等ニ病變ヲ見ズ。

第四群(初メ)(古苗、後同新苗接種ノ豫防力)

豫防苗ノ毒力ハ認ムルニ由ナシ。即チ接種局所ニ何等病變ヲ始サズ、部位腺ハ腫脹セルモ、全然癩痕治癒ノ状態ニ在リ。

感染接種ヲ受ケタル試獸中、大多數ハ感染接種局所ニ何等病變ヲ有セズ、極メテ少數ガ右局所ニ幾何ノ變化ヲ有セシモ殆ンド稱スルニ足ラズ。部位腺ノ腫脹ハ之ヲ認ムルモ悉ク癩痕治癒ノ状態ニ在リ。其他ノ臟器ニ就テ精査スルニ、少數ニ於テ、脾臟ニ零細ナル結節一兩個ヲ認メシ他ハ稀ニ肺臟ニ肉眼ヲ以テ確認シ難キ結節ヲ見シニ止ル。肝腎其他ニ病變ヲ認メズ。

殊ニ本群中、第一組(豫防接種四回)ノ成績ハ全實驗ヲ通ジテ最モ優秀ナリ。

概括

一、第一群。健獸ニ感染苗ヲ接種シタルモノハ全部罹患シ、時日ヲ經ルニ從ツテ益々高度ノ病變ヲ呈シタリ。

一、第二群。弱毒菌普通培養乳劑一ケ年貯藏ヲ以テ豫防接種ヲ行ハレタル動物ハ、一ノモノハ完全豫防ノ免疫ニ達シ、少數ハ反之重ク感染シ、多數ハ輕度ノ感染ヲ蒙ルニ留マリ、即チ概シテ個性ニ依リ、時日ノ長短ニヨリ免疫ヲ享受スルノ程度ニ高下アリ。動物ハ免疫ヲ獲得スルコト疑無キモ、其免疫ハ個性ニヨツテ太ダシキ差アリ。

一、第三群。比較的新鮮ナル特殊培養ヲ以テ免疫セルモノハ、一部ハ既ニ此豫防接種ニ因リテ一旦極メテ輕度ノ局所性感染ヲ受ケテ後治癒シ、感染接種ニ對シテ多數ハ殆ンド完全ナル免疫ニ達シ、少數ハ感染罹患スルモ多クハ時日ヲ經ルニ從ツテ治癒ノ傾向ヲ示シ、斯クテ個性ニヨリテ、感染スルモノト、セザルモノトヲ發シタレ共、概シテ既ニ個性ヲ超越シテ不偏的ニ免疫ヲ現ハシ得タルニ近シ。

一、第四群。同前乳劑ノ陳舊接種苗ヲ以テ先ヅ所置シ後比較的新鮮ナル苗ヲ用ヒテ豫防接種ヲ施シタルモノニ在ツテハ、豫防接種ニ感染セザルハ素ヨリ、二回、三回及ビ四回各菌量ヲ異ニシ、新古ヲ交ヘタル豫防接種ニヨリテ、殆ン

ト完全ナル豫防免疫ヲ享受シ、豫防接種少キモノ、少數ハ感染罹患シタルモノアレ共、其病變ハ亦殆ンド言フニ足ラザル輕度ノモノニシテ、殊ニ四回ノ豫防接種ヲ受ケタル第一組ノ如キ、七頭中六頭ハ全ク感染ノ形跡モ無ク、即チ完全免疫ニシテ既ニ個性ヲ超越セル不偏的ノモノナルコトヲ明確ニスルヲ得タリ

此成績ハ幼乳兒若クハ免疫無キ人體ニ豫防接種ヲ施スコトノ極メテ有望ナルヲ語ルモノナリ。

(自抄)

腸管ノ結核菌吸收機轉(結核菌ノ經腸感染機轉)ニ就テ

醫學博士 熊谷謙三 郎君

石黒貞正君 (大阪)

結核菌ガ腸粘膜ヲ通過シテ動物ニ感染スル事ハ既ニ古クヨリ知ラレタル事ニシテバウムガルテン、ペーリング氏等ハ主ニ之ヲ主張シテ居リマス。殊ニ幼兒腸管ニ於テハ特ニ腸ヨリ結核菌ノ感染ガ旺盛ナリト稱シテ居リマス。近時オルト、ラビノウイチ、ストラウス氏等ハ生結核菌ヲ直接胃内或ハ腸内又ハ直腸内ニ注入スル時ニハ極メテ短時間内(二至乃四時間)ニ門脈血ニ結核菌ノ出現スル事ヲ證明シテ居リマス、併シナガラ此ノ結核菌ハ腸管ノ如何ナル部位及如何ナル粘膜ヨリ吸收セラル、ヤ否ヤノ點ニ關シテハ其ノ研究未ダ不完全ノ點ガ多カッタノデアリマス。

演者ノ一人熊谷ハ以上ノ點ニ關シ組織學的方面ヨリ研究シ明確ナル結果ヲ得、昨年ノ病理學會及內科學會ニ報告シタノデアリマス、即チ生或ハ死結核菌ヲ成長家兎ニ口ヨリ與ヘマス時ニハ常ニ盲腸部及蟲樣突起部淋巴濾胞ヨリ吸收セラレ小腸下部ノバ氏斑ヨリハ極メテ僅カニ菌ノ吸收セラル、狀ヲ見、其他ノ小腸及大腸粘膜ヨリハ決シテ吸收セラル、事ヲ見ナカッタノデアリマス。

此場合ニ尙ホ研究ス可キニツノ重大問題ガ殘ツテ居ッタノデアリマス。

第一ハ生及死結核菌ヲ與ヘテヨリ七日乃至十四日目ニハ盲腸部淋巴濾胞内ニ菌ガ吸收攝取セラル、ニ拘ラズ、此局所ニ

ハ絶エテ結核性變化ヲ起サズシテ組織内ニ進入スル事デアリマス、之ハ佐多先生ガ年來ノ主張タル第一期感染ノ場合ニ於テハ結核菌ノ侵入局所ニ變化ヲ起サズシテ容易ニ吸收セラレ、免疫的基礎ノ上ニ於ケル感染ハ其侵入局所ニ病變ヲ起スト云フ說ノ一端ヲ説明シテオルモノ、如ク、之ヲ解決スルニハ、家兔ニ對シ結核免疫ヲ行ヒ夫レニ結核菌ヲ經口的ニ與ヘ腸濾胞ヨリ菌ノ侵入局所ニ如何ナル反應ヲ呈スルカニヨリ決定スルノデアリマス。

第二ハ從來結核菌ノ腸管内感染ハ成人ニ於ケルヨリモ幼兒ニ於テ最重要視サレテ居リマス、從ツテ幼兒ニ於テハ其ノ感染率ハ屢々多イト一般的ニ信ジラレテ居ル處デアリマス、而シ自分等ノ種々ノ研究ニヨルト以上ノ如キ考ヘニ對シ多大ノ疑問ヲ置ク可キ點ヲ見付ケタノデアリマス、夫レハ二三年來腸管ノ墨粉吸收試驗ヲ老幼二群ノ家兔ニ就テ試ミルニ其ノ墨粉ノ腸管ヨリ吸收セラル、程度ハ成長家兔ニ極メテ顯著デアリマシテ幼年家兔ハ全ク之レニ反スルノデアリマス、夫レデ結核菌ニ於テハ此老幼二者ノ間ニ菌吸收關係ガ如何ナルモノナルヤヲ組織的方面ヨリ研究スル事ハ亦甚ダ興味アル且ツ重大問題デアリマス。

以上第一問題ニ就テハ目下研究中デアリマスガ第二ノ問題ニ就テハ爰ニ御報告出來ル迄ニ其成績ガ到達シタノデアリマス。次ニ其實驗報告ヲ致シマス。

老幼二者ノ間ニ結核菌ノ腸管ヨリ吸收セラル、程度ヲ比較試驗致シマスル前提トシテ、一定ノ分子ヲ有スル「カルミン」溶液ガ此老幼二者ノ間ニ腸管ヨリ吸收セラル、程度ニ差異ノ存在スルモノナリヤ否ヤヲ検査シタノデアリマス、此ノ方面ハ石黑學士ガ熱心ニ研究サレタノデ其成績ハ表ノ如ク(表略ス)老年乃至中年家兔ノ腸管ヨリハ著シク「カルミン」分子ガ吸收攝取セラレ幼年家兔ニ於テハ之ニ反シ其程度極メテ少ナイノデアリマス。

次ニ老幼二群ノ家兔ニ毎日體重ニ比例シ(幼者ノ方少シ多量)同一割合ニ死結核菌ノ大量ヲ與ヘタノデアリマス。而シテ八日目二週間目ニ撲殺シ、腸ノ種々ナル部分ヲトリ詳細ナル組織學的菌研索ヲ行フタノデアリマス、其ノ結果ハ表(略ス)ニ示スガ如ク、成長家兔ニハ多數ノ菌ヲ見、幼年家兔ニハ菌ヲ證明スル事ガ尠ナカツタノデアリマス。

以上申述ベマシタ如ク老幼二群ノ家兔ニ形態成分タル墨粉ヲ經口的ニ與ヘタル場合ハ老者ハ極メテ顯著ニ淋巴濾胞内ニ

吸收攝取セラレ、幼者ハ之ニ反スル事、亦一定分子ヲ有スル「カルミン」溶液ヲ老幼二者ニ同一ノ割合ニ與ヘタル場合モ亦墨粉ト全ク同様關係存在スル事、竝ニ昨年來當研究所ニ於テ熱心ニ研究シテオル南學士ノ成績ニ依リマス、同君ハ老幼二者ノ家兔ニ「チフス」菌ヲ經口のニ同一ノ割合ニ與ヘタル場合ノ免疫關係ヲ検査セシニ、老者ハ高度ニシテ幼者ハ其ダ低カツタノデアリマス、以上ノ如クハ、組織學的方面ヨリ他ハ免疫學的方面ヨリ（多少ノ顧慮點アルモ）考ヘ、尙ホ亦自分ノ結核菌ヲ與ヘタ只今ノ成績ヨリ致シマシテ、私ハ私ノ成績ノ結果ヲ深ク信ジルモノデアリマス、以上ノ實驗ヨリ致シマシテ結核菌ノ經腸感染ハ從來ヨリ考ヘラレテ居ツタ事、即成人ヨリモ幼弱者ニ多イト云フ様ナ事ハ實際尙ホ考慮ノ餘地充分存在スル事、竝ニ結核菌ノ腸管侵入機轉ハ從來考ヘラレテ居ツタ説明トハ全ク反對デ、主トシテ腸淋巴濾胞自己ノ吸收機能強弱其ノモノニ依ルモノナラント考ヘラル、ノデアリマス。但シ此ノ問題ハ種々ノ方面ヨリ研究ヲ重テ決定ス可キモノト考ヘマス。

（自抄）

熊谷君ノ演說ニ對スル附議

青山敬 二一君（大阪）

博士ノ御研究ヲ大變面白シク拜聽シマシタ、

成長家兔ニ於ケル腸管ノ結核菌侵入ハ或ハ之ヲ人間ノ實際狀態ニ比シテ然ル可キヲ信ズル理由ガアリマス、即チ其ハ蟲様突起炎乃至盲腸炎ノ發病ガ小兒期ニ少ク壯者ニ多キハ腸濾胞ノ關係デアルト云ハレテ居リマス、扱テ私ノ扁桃腺ノ實驗デハ幼少家兔（七〇〇乃至一〇〇〇瓦）デアリマシテ、扁桃腺カラ盛ニ結核菌ガ這入リマスカラ、若シ之ヲ人間ノ狀態ニ比シ得ベクンバ、幼少期ニハ或ハ主トシテ扁桃腺カラ感染シ、壯者ニ於テハ又大ニ腸管感染ヲスルモノデアラウト思ハレマス。

脂肪ノ腸管吸收機轉ニ就テ

大串利一 郎君（大阪）

本研究所ニ於テハ所長佐多博士ハ數年來ヨリ結核菌ノ内服ニ由ル免疫性發現ニ關シテ目下實驗研究中ナリ。抑々結核菌ガ腸管ノ如何ナル部分ヨリ如何ナル機轉ニヨリ進入スルヤラ精確ナル組織の研究ニ依リテ證明シタル實驗の研究ハ極メテ少シ。於是結核菌ノ吸收攝取機轉ヲ組織的ニ精査セント欲シ、先ヅ比較研究トシテ曩ニ熊谷博士ハ形態成分ノ腸管吸收機轉ニ就キテ報告セリ。余モ比較研究ノ一部ヲ分擔シ脂肪ノ腸管吸收機轉ヲ實驗的ニ研究セシヲ以テ爰ニ報告セントス。

試驗動物トシテ犬、白鼠、猫ヲ使用シ之レニ牛乳、牛酪、「オレーブ」油ヲ與ヘ一定時間後ニ撲殺シテ之レヲ顯微鏡的檢査ニ供セリ。而シテ犬ニ於テハ主トシテ老幼間ノ脂肪吸收狀態ヲ比較研究シ、白鼠ニ在リテハ腸管ニ於ケル脂肪吸收ノ時間的關係ヲ明ニセリ。

實驗成績ヲ綜括スレバ次ノ如シ

- 一、哺乳動物ハ脂肪食餌攝取後五時間ニシテ胃粘膜炎及ビ小腸粘膜炎ニ脂肪顆粒ノ增多ヲ認ム
- 二、犬ノ老幼間ニ於ケル脂肪吸收狀態ヲ比較スルニ格段ナル差異ヲ認メザルモ、親犬ノ淋巴濾胞上皮細胞ハ仔犬ノモノニ比シテ脂肪吸收度ハ微弱ナリ。
- 三、小腸上部位ノ絨毛上皮ノ脂肪吸收機能ハ最モ旺盛ナリ。而シテバイエル氏斑ノ淋巴濾胞ヲ覆ヘル上皮細胞モ亦空腸ニ存スルモノニ主トシテ脂肪吸收ノ像ヲ認ムルモ同部位ノ絨毛上皮ニ比較スレバ吸收度ハ遙カニ微弱ナリ。
- 四、絨毛上皮ノ中先頂部位ノモノノ脂肪吸收機能ハ旺盛ニシテ次ニ絨毛中間部、最後ニ絨毛基底部上皮細胞ハ最モ吸收機能ハ微弱ナリ。バイエル氏斑ノ淋巴濾胞ニ於テモ其ノ先頂部ヲ覆ヘル上皮細胞ニ脂肪吸收度ハ強シ。
- 五、腸粘膜炎上皮細胞ノ脂肪吸收能力ニハ一定ノ限度アリ、即チ吸收ハ極期ニ達シ、脂肪飽和狀態トナレバ爾後ハ著シク

攝取能力ヲ減退ス。而シテ脂肪吸收ノ初期ヨリ飽和ニ至ル迄ノ時間的經過ハ七乃至十時間トス。

六、脂肪ハ微細ナル「エムルジオン」ノ状態ニ於テモ其ノ儘吸收攝取セラレザルガ如シ。

七、脂肪ノ吸收機轉ハ凡テ腸粘膜絨毛上皮細胞竝ニバイエル氏斑ノ淋巴濾胞ヲ覆ヘル上皮細胞内ニ瀰蔓性ニ顆粒狀ニ吸收攝取セラレ上皮細胞間攝取ノ像ヲ認メズ。
(自抄)

大串君ノ演説ニ對スル附議

熊谷謙三郎君(大阪)

只今大串君ノ成績ヲ見マスト、仔犬ノ方ハ腸管ヨリ吸收旺盛ニシテ大犬ハ尠キ様デアリマシテ、二見私等ノ成績ト全ク反對ノ結果ノ様ニ思ハレマス、而シテナガラ之レハ決シテ矛盾ハシテ居ラスノデアリマス、夫レハ脂肪ノ腸管吸收ハ種々議論サレテ居リマシテ以前ハ脂肪小球ノマ、吸收セラレル、或ハ「エムルジオン」狀ノ儘吸收セラレル、ト考ヘラレテ居リマシタガ、最近ノ研究ニヨルト脂肪ハ溶解シタ状態ニ於テ吸收サレルト云フ事ニナツテ居リマス。

然ルニ吾々ノ場合ハ墨粉ニシロ結核菌ニシロ一定ノ形ヲ持ツテ居リマス、「カルミン」モ亦一定ノ分子ヲ有シテ居リマス、即チ吾々ノハ有形物質ニ就テノ腸管吸收デ、大串君ノハ溶解シタ場合ノ腸管吸收デアリマシテ、其ノ成績ガ同一デナクトモ決シテ矛盾ハシテオラヌト存ジマス。
(自抄)

動靜脈内注入生結核菌ノ分佈及組織反應ノ比較(第二報)

天野勳君(大阪)

流血中ニ生結核菌ヲ注入シ、菌ノ分佈竝ビニ組織反應ヲ探究センニ、生菌注入部位ヲ心臟左室ニ求ムルハ最モ合理的ナ

ルハ論ヲ俟タザルナリ、然ルニ今日マデ心左室注入ニヨル試験ノ等閑視セラレタルハ甚ダ首肯シ得ザルコトナリ。コ、ニ於テ私ハ該實驗ヲ行フ際心左室注入試験ヲ主トシ、加フルニ靜脈内注入試験モ行ヒテ比較研究シ、諸臟器ノ結核ニ對スル抵抗如何ヲ決定シ、進デ各種動物ノ結核ニ對スル感受性ニ差異アル事實ノ解決ニ資セントス。

余ハ昨年病理學會ニ於テ主トシテ菌注入後比較の時日ノ經過セルモノ及斃死時ノ家兔、「モルモット」諸臟器ノ組織反應ヲ檢索セシ實驗成績ヲ報告セリ、尙其ノ際心左室注入ノモノハ實驗的ニ「フリユクテン」及結核性脊髓炎ヲ惹起シ、而シテ前者ニ於テハ爾後二三ノ追試ヲ行ヒテ「フリユクテン」中ニ結核菌ヲ證明シ同症ノ發生機轉ニ就テハ眼科學會ニ報告セリ。此ノ第二回報告ハ「モルモット」ニ於テ主トシテ動靜脈内ニ生結核菌注入後、極メテ初期ニ於ケル體內ノ菌ノ分布状態ニ就キテ講究セルモノナリ。

尙血中ニ結核菌ノ侵入セル際肺臟ニ最モ集叢シ且ツ最モ侵サル、事實ヲ今日マデ單ニ肺臟ハ濾過器樣臟器ナルタメト思考セラル、モ果シテ如何、此ノ問題ヲ解決セン爲メ動脈血ノミヲ介シ(即チ氣管枝動脈ヲ通ジテ)肺臟ニ至ル菌ノ分布ト其ノ際他ノ諸臟器ノ分布状態ヲモ比較檢索ニ努メタリ。

實驗方法トシテハ「モルモット」ニ於テ菌注入後直後、二十分、三時間、六時間、十二時間及一日、二日、三日目ニ各二頭宛撲殺シ、直チニ組織中ノ結核菌ヲ染色シ菌ノ多少ヲ比較セリ、注入量ハ一頭ニ付キ〇・五厩、注射部位ハ心左室及頸靜脈ニシテ總數二十六頭、尙三頭ニ於テハ靜脈血ノ心臟歸流ヲ豫メ靜脈切斷ニ依リテ停止シ、直チニ心左室ニ菌ヲ注入シ氣管枝動脈ヲ通ジテ肺臟ニ分布スル状態ヲ觀察セリ

以上ノ實驗成績ヲ總括スルニ、

一、心左室注入ノ際菌ノ分布ハ肺臟ニ最モ多ク、次ニ脾、肝ニ多ク、次デ骨髓、腎、腦、淋巴腺、脊髓、副腎ナリ頸靜脈注入ノ際ハ肺ハ他ノ諸臟器ヨリモ遙ニ多數ノ菌ヲ認メ、是レヲ心左室注入ノ際ニ於ケル肺ノ分布ト比較スルニ多數ニシテ格段ノ差アリ

尙肺臟ニテハ單ニ氣管枝動脈ノミニ依リテ分布ヲ受クル際ニ於テモ、諸臟器中最モ多數ノ菌ヲ認ムルガ故ニ、血中ニ生結核

菌ノ侵入セル時ハ、肺ハ最モ多ク菌ノ分佈ヲ被ル臟器ナリ。

一、諸臟器ニ於ケル菌ノ保有停滯セル關係ヲ觀察スルニ、肺ハ最モ永ク次ニ脾、肝ノ順位ヲトルモ、最初脾、肝ハ略同一程度ノ分佈ナルモ、十二時間後ハ脾ハ半減シ肝ハ僅ニ存スルノミニテ、三日ニ至リテハ肺、脾ニ辛ジテ殘存シ、他ノ諸臟器及流血中ニハ全ク見當ラザルニ至ル、

而シテ菌ハ動靜脈内ニ注入セル後、最初ノ間ハ主トシテ血管内ニ存スルモ、時日ノ經過ト共ニ肺臟ニ於テハ毛細血管周圍ノ上皮様細胞ノ内外ニ、脾ハ其ノ靜脈竇内ニ肝ハクッペル氏星芒細胞中ニ、腎臟ハ絲毬體ニ、腦ハ實質中ノ血管周圍ノ上皮様細胞ノ内外ニ、腸ハ主トシテバク氏集腺ニ、脊髓ハ主トシテ灰白質中ニ、副腎ハ主トシテ皮質中ニ多數ヲ認ム。

一、流血中ノ結核菌ハ動靜脈内注入後十二時間ニハ全ク見當ラズ、尙此ノ際諸臟器中ニモ漸次減少ノ徵アリ、此ノ事實ハ血中ニ一時ニ多量ノ生結核菌ヲ血管内ニ注入スルトモ次第ニ減少セルコトヲ示スモノニシテ、是レニ據リテ想像スルニ、人類重症肺結核患者ノ血中ニ結核菌ヲ證明スルガ如キハ、體內ニ存在スル結核病竈ヨリ絶ヘズ連續的ニ流血中ニ菌ノ送入セラル、ニヨルモノナル可シ、且又人類ノ全身粟粒結核症ノ際モ恐ラク同一機轉ニ因ルモノナラン。(自抄)

副腎切除動物ノ結核感染試驗

加藤 謙 一君(大阪)

余ハ多數ノ「モルモット」ニ副腎切除手術ヲ試ミ、更ニ施術後ノ經過良好ナルモノヲ數頭選ビ之レ等ニ人型生結核菌ヲ接種シ其ノ感染試驗ヲ行ヘリ。

(一) 動物副腎切除實驗

抑動物ノ副腎ヲ切除スル時ハ其偏側副腎ノ全切除ハ何等生命ニ危險ナキモ、之レヲ兩側ニ行フ時ハ其手術方法ノ如何ニ拘ラズ一次的ナレバ勿論、假令偏側ヅ、時ヲ隔テ、施術スルモ副腎全部ヲ失ヘバ決シテ長時日生存シ得ザルモノナリ。

先ニストレール、ワイズ氏等ハ種々ナル動物ノ副腎ヲ全剔出シ「モルモット」ニ於テハ其生存時間四時間乃至九時間ヲ得タリト、後ビードル氏ハ哺乳動物ノ副腎全剔出ヲ試ミ其ノ結果副腎皮質ノ八分ノ一以上ヲ殘セバ死スル事ナシト言明サレタリ、亦徳光氏ハ家兔ニ於テ其ノ副腎ヲ全剔出スル時ハ十時間乃至十二時間生存ス、然レドモ皮質ノ二分ノ一乃至三分ノ一ヲ殘セバ毫モ生命ニ危険ヲ醸ス事ナク能ク生存シ得ルモノナリト報告セラレタリ。

余ハ「モルモット」ニ開腹手術ヲ施シ、先ヅ偏側副腎全剔出ヲ試ミタルニ、其結果良好ニシテ長時日ノ生存ヲ觀タリ。次イデ一次のニ兩側副腎ノ全切除ヲ行ヒシガ何レモ手術後短時間ニシテ死ノ歸轉ヲトレリ。

茲ニ於テ二次のニ兩施術ニ種々ナル間隔ヲ置キ全切除ヲ試ミタリ、而シテ死後ハ必ズ之レヲ解剖シ其ノ手術部ヲ檢シ副腎ノ完全ニ切除サレタルカ否カラ肉眼的竝ニ顯微鏡的ニ檢査シモシモ殘存部ヲ見出ス時ハ其ノ大サヲ測リ切除副腎ノ大サト比較シ之レヲ記載セリ。

實驗成績

偏側副腎切除 十三頭(十頭長時日生存、三頭施術後死亡)。

兩側副腎切除。

一次の切除 五頭(内二頭ハ施術中死亡、三頭ハ五時間以内生存)。

二次の切除 二十六頭(内一頭ハ施術中死亡、二十五頭生存)。

最後ノ二十五頭ノ生存時日竝ニ副腎部ノ解剖的所見次ノ如シ。

四十八時間以内ノモノ十二頭(内一頭ハ一側ノ皮質部七分ノ一殘存、十一頭ハ全部切除)

四十八時間乃至四日間生存ノモノ六頭(内四頭ハ全部切除、二頭ハ不明)。

三十六日乃至百八十五日生存ノモノ七頭(内二頭ハ一側ノ四分ノ一乃至七分ノ一皮質部殘存、二頭ハ一側ノ皮質部八

分ノ一乃至十分ノ一殘存、三頭ハ不明)。

(附) 副腎切除「モルモット」ノアッシュチル氏現象測定。

副腎切除施術後生存セシ「モルモット」ノアッシュユル氏現象ヲ觀ルニ大抵陽性ノ成績ヲ得タリ(但シ五秒間ノ心動數ノ減少五以上ナル時陽性トセリ)、然レドモ施術後約二十時間乃至二十四時間ハ心動數ニ變動ヲ見ザルカ又ハ五迄ノ減少現ハル。

總括

一、「モルモット」ノ偏側副腎切除ハ何等生命ニ危險ヲ及サズ。
二、「モルモット」ノ兩側副腎ヲ同時ニ切除スル時ハ五時間以上生命ヲ維持スル事能ハズ。
三、「モルモット」ノ偏側副腎全切除後時日ヲ隔テ、二次的ニ他側ノ副腎ヲ切除スル時ハ十時間以上四日間迄生存シ得タリ。

四、「モルモット」ノ偏側副腎全切除後二次的ニ他側ノ四分ノ一乃至十分ノ一ノ皮質部ヲ殘シテ切除スルモ長時日生存セシメ得。

五、「モルモット」ハ副腎切除後二十時間乃至二十四時間ニシテアッシュユル氏現象現ハル、而シテ長時日持續スルモノナリ。

(二) 結核感染試驗

兩側副腎切除「モルモット」ノ該施術後其ノ經過良好ニシテ比較的長時日生存シ得ルト認メタルモノヲ選ビ、之等ニ人型生結核菌ヲ接種セリ、但シ兩副腎切除後結核菌接種迄ノ期間ノ長短ニ依リ之ヲ三組ニ分チテ試驗セリ。

A 組

兩側副腎切除後比較的短時日(十一日目ノモノ一頭、二十一日目ノモノ一頭)ニ於テ人型生結核菌佐多AI系ノモノ○・二趾皮下ニ接種シ二十五日目ニ撲殺解剖シ、肉眼的及顯微鏡的變化ヲ觀察セリ。

B 組

兩側副腎切除後三十四日目ノモノ一頭、四十日目ノモノ一頭ニ人型生結核菌佐多AI系○・二趾下腹部ノ皮下ニ接種シ四

十日目に撲殺解剖シ肉眼的及顯微鏡的變化ヲ觀察ス。

C 組

兩側副腎切除後比較的長時日(百二十九日目)ニ於テ人型生結核菌○・二疋下腹部ノ皮下ニ接種シ四十五日目斃死ス、觀察同様。

對照

對照トシテ體重ノ略等シキ健康「モルモット」ヲ各組ニ頭ヅ、選ビ一ツハ切除動物ト同様ノ方法ニ於テ腹部ヲ切開シ、他ノ一ツハ手術ヲ施サズシテ同量ノ生結核菌ヲ接種セリ。

解剖所見

A 組、解剖所見、組織所見ニ於テ副腎切除動物、對照動物ハ差異的病變ヲ認メズ、兩者ハ接種部位化膿竈ヲ作り、同側鼠蹊腺ハ小豆大ノモノニ、三個腫大シ剖面乾酪變性ヲ示ス、脾ハ多少肥大スルモ限局性變化ヲ認メズ、其他著變ナシ。

B 組、解剖所見ニ於テ肝臟充血シ粟粒大ノ灰白色結節數個散發シ、肺臟ハ表面多少充血灰白色半透明ノ粟粒大ノ結節數個發生シ、脾臟ハ其ノ大サ不明ナレド表面不半剖面粗糙ナリ。

組織所見、肝臟ハ小ナル上皮様細胞結節ノ散發シ、肺臟ハ大部分淋巴細胞結節ヲ見ル、脾臟モ上皮様細胞結節ノ散發スルヲ見ル。

對照動物、脾臟ハ約二倍大腫大シ、表面、剖面粟粒大結節散發ス、肝臟充血シ肉眼的ニ結節ヲ見ズ、肺臟同様。

組織的ニハ脾臟ハ中央初期乾酪變性ニ陥レル結節ヲ見ル、肝臟ハ淋巴細胞結節生ズ、肺臟同様結節ヲ見ル、其他ニ於テ差異的著變ヲ認メズ。

C 組、肝臟約三倍大ニ腫大シ、表面剖面粟粒大ヨリ帽針頭大ノ灰白色ノ結節無數發生ス、肺臟、表面剖面帽針頭大ヨリ小豆大ニ互ル半透明灰白色結節多數發生シ、脾臟ハ近接部ト癒著甚シク其ノ大サ不明ナレドモ剖面粗糙ナリ。

組織的所見、肝臟、肺臟共ニ大小多數ノ上皮様細胞結節現レ、脾臟ハ所々淋巴細胞結節ノ散發スルヲ見ル。

對照動物、肝臟充血多少腫大ヲ認ム、粟粒大結節散發ス、肺臟モ同様大ノ結節發生シ其ノ周圍充血ス、脾約三倍大ニ腫大シ表面、割面粟粒大ヨリ帽針頭大結節現ハル。
組織的ニハ肝臟、肺臟上皮様細胞結節ヲ見ル、脾臟ハ中心乾酪變性ノ起レル比較的大ナル結節多數發生ス、其他ノ部ニ差異的著變ヲ認メズ。

總括

兩副腎切除「モルモット」ニ人型生結核菌ヲ皮下ニ接種スル時ハ、該動物ノ結核性病變ノ輕重ハ副腎切除後菌接種迄ノ間隔日數ノ長短ニ比例ス、而シテ各臟器の病變ノ差異ハ肝臟、肺臟ニ於テ著明ニシテ脾臟ニ於テハ比較的小ナルモノ、如シ。

(自抄)

加藤君ノ演說ニ對スル附議

竹岡三之吉君(鳥取)

余ハ副腎「エキストラクト」ノ結核免疫ニ就テ試驗シタルニ、副腎「エキス」及「アドレナリン」ヲ結核菌「エムルジヨン」ト共ニ注射シタルモノハ、單純ノ結核「エムルジヨン」ヲ注射シタルモノヨリハ免疫ノ反應稍々強度ニ顯出スルヲ實驗シタリ、即チ對照動物ノ凝集反應ガ三十倍ニヨリテ反應ヲ呈スル場合ニ於テ、四十倍ニヨリ反應ヲ現ハシ、而シテ動物ノ體量ハ單純結核菌ヲ注射シタル家兔ガ千七百五十瓦ヨリ千五百瓦ニ減ズルニ反シテ、千七百瓦ヨリ千八百瓦ニ増量シタリ。

小兒解屍ニ於ケル結核病竈ニ關スル統計的研究

佐藤正君(東京)

著者ハ明治三十年ヨリ大正九年ニ亙ル二十四年間ニ東京帝國大學醫學部病理學教室ニ於テ解屍セラレタル年齡滿十五歲未滿ノ小兒總解屍一三五七例ニ就キ詳細ニ剖檢記載ヲ閱了シ、其臨牀の診斷ト剖見の所見トヲ校合シ、性別、年齡別、病竈部位、病型等ニ關スル統計的觀察ヲナシ病理學的考察ヲ與ヘタリ。

(自抄)

結核補體轉向反應ノ理論及ビ實驗的研究

鴻上慶治郎君(東京)

補體轉向反應ノ根本原理トスル處ハ各種ノ疾患ニ於テ齊一ニシテ、其ノ間、毫モ識別軒輊ヲ認メズ。然ルニ或ル種ノ疾患ニ於テハ該反應頗ル適確ニシテ、特異性ヲ帶ビ、之ヲ一般臨牀上ニ應用シ、診斷、豫後、治療、ノ準繩、指針トシテ吾人ヲ裨益スル處蓋シ僅少ニ非ズ。就中微毒ニ於ケルワ氏反應ノ如キニ至リテハ普ク臨牀上ニ應用セラレ、人口ニ膾炙セラル、免疫學的診斷法トシテ一異彩ヲ放テリ。結核ニ對スル該反應ノ從來容易ニ且ツ適確ニ遂行シ得ベクシテ、然ラザリシ所以ハ一面免疫原ノ不良ナリシト、一面其ノ操作法ニ不備缺陷ノ存セシニ因據スルモノナリト信ズ。著者ハ補體轉向反應ニ關與スベキ各要素ニ對スル理論的研覈ニ立脚シ、之ヲ實驗ニ照ラシテ先進諸家ノ補體轉向反應操作中長ヲ採リ短ヲ棄テ、按配考慮ノ結果優秀ナル方法ノ下ニ、免疫原ニ於テモ在來已知ニシテ有名ナルモノ數種ニ涉リテ實驗的ニ其ノ優劣長短ヲ探求セル結果、吾ガ東京市療養所ニ於テ、顧問軍醫中將矢部閣下ノ御指導ノ下ニ製出セル、所謂、ベスレドカ氏結核菌卵黃培養基免疫原ヲ以テ最優秀ナリト認メタルガ故ニ、之ヲ以テ各種ノ結核、結核外ノ他疾患及ビ健康者等合シテ八百四十二例ノ補體轉向反應ヲ實施セリ。實驗例數敢テ廣汎饒多ナリトナスルヲ得ザルモ、其ノ反應ノ價值ヲ論評判斷シテ甚ダシク正鵠ヲ失スル懼レナシト信ズ。實驗ノ結果ヨリ論斷セバ、結核補體轉向反應ハ第一、二、及ビ三期ヲ通ジテ、停止、概治、或ハ治癒狀態ヲ取リテヨリ長期ヲ經過セルモノ、奔馬ノ如ク著シク進行性ヲ呈セル急性結核症、或ハ粟粒結核乃至ハ榮養衰耗シテ死期已ニ切迫セルガ如キモノヲ除キ、活動狀態ヲ示セル結核症ニ於テハ、

殆、一〇〇％ノ陽性比率ヲ示ス。加之、潜在性或ハ初期結核等ニテ臨牀的ニ或ハ「レントゲン」診査等ニ由ルモ、殆ンド其ノ診斷ニ彷徨スルガ如キ場合ニ遭遇スルモ、若シ被檢者ガ活動性結核竈ヲ那邊カニ存在保有セルモノナラバ、歴然トシテ反應陽性ヲ顯ハスヲ見ルベシ。蓋シ其ノ活動性結核ニ對スル同反應ノ鋭敏ナル、適確特異ナル、陽性比度ハ大ナル等ノ諸點ニ於テ、殆ンド微毒ニ於ケルワ氏反應ノ壘ヲ摩スルノ慨アリト云フベシ。次デ著者ハ結核補體轉向反應ト自餘ノ免疫學的反應即チワ氏反應ザツクスゲオルギー氏反應、「ツベルクリン」反應「凝集反應」、「喰菌作用」等トノ間ニ於ケル相互關係、楔合、不合致等ノ點ヲ論述シ、更ニ在來ノ免疫原中ニアリテハ、白眉ト認ムルベ氏免疫原ノ有スル缺陷、短所ニ對スル著者ノ補足法ト著者ノ所謂「セラチン」加補體轉向反應ヲ説示セルモノナリ。 (自抄)

鴻上君ノ演說ニ對スル附議

川村 六郎君 (東京)

菌乳劑ヲ其儘「アンチーゲン」トスルヨリモ菌浸出液ヲ補體結合試驗ニ應用スル方成績宜シキガ如シ、殊ニ全然「ホモゲ子」發育ニ至ラザル菌株(液中發育菌)ヨリモ全然「ホモゲ子クルツール」ヲ成效シタル菌株ノ方特異性ナルヲ思ユ、但シコレニ用ヒタル「アルカリ」ノ種類ニ關セザルベシ。

鴻上、川村兩君ノ演說ニ對スル附議

矢部 辰三郎君 (東京)

鴻上氏ノ使用セシ「アンチーゲン」ハベスルドカ氏ノ最終報告ニ依リ東京市療養所ニ於テ製セラレタルモノニシテ、卵黃ニ「アルカリ」ヲ加ヘ清澄トナシ水ヲ加ヘタルモノニシテ、川村氏ノ「ホモゲン」培養ニ於テ使用セラレタルモノト略ボ同

一ニシテ唯「アルカリ」ノ苛性「ソーダ」ナルト炭酸曹達トノ差ノミニシテ、ベ氏ノ舊「アンチゲン」ニ非ラズ、液面ニ發育セズ液中ニ結核菌ハ發育セシ卵黄液培養ナリ。

(自抄)

結核患者ニ於ケル喰菌促進物質ニ就テ

小林 健 兒君 (東京)

喰菌促進物質トシテ知ラレタルモノハ「オブソニン」及ビ「トロロピン」ナリ。「オブソニン」トハ喰菌雙攝體ガ補體ト協力シテ喰菌現象ヲ惹起スルモノニシテ新鮮ナル健康及免疫血清ノ中ニ存在スルモノナリ。次ニ「トロロピン」トハ補體ヲ要セズシテ單獨ニ喰菌現象ヲ惹起スルモノニシテ非働性免疫血清ノ中ニ存在スルモノナリ。

結核患者ニ於テハ是等ノ喰菌雙攝體及「トロロピン」ヲ每常必ズ證明スル事能ハズ、或患者ニ於テハ喰菌雙攝體ヲ證明シ得レドモ「トロロピン」ヲ缺キ、又或他ノ患者ニ於テハ「トロロピン」ヲ證明シ得レドモ喰菌雙攝體ヲ缺ク、又全然是等兩者ヲ缺クモノアリ。

然ルニ茲ニ結核患者ニ於テ每常必ズ證明シ得ベキ喰菌促進物質アリテ然カモ特異性ヲ有シ且ツ易熱性ナルヲ特徴トス。今迄特異性ヲ有スル喰菌促進物質ハ喰菌雙攝體ニシロ、「トロロピン」ニテモ何レモ耐熱性ナリ然ルニ此物質ハ易熱性ナリ。

免疫血清ハ新鮮ナル場合ハ皆非特異性ナリ、之レ正常「オブソニン」ノ存スル爲ナリ、コノ正常「オブソニン」ノ作用ヲ除去スル爲メニハ從來加熱ノ方法ニ據レリ、然シナガラ加熱法ニテハ此ノ特異性ヲ有スル易熱性ノ喰菌促進物質ヲ檢出スルコト不可能ナルハ當然ナリ。

因ツテ該物質ヲ檢出スルニハ枸橼酸曹達法ニ據ラザルベカラズ、此法ハ加熱法ニ比スレバ緩和ナリ。枸橼酸曹達法トハ即チ大谷氏法ナリ。二%枸橼酸曹達(食鹽水ニテ製ス)。

一容量ニ血液二容量ヲ混ズレバ血漿ヲ得ベシ、更ニ試験ニ用フル菌液ハ一・五%枸橼酸曹達溶液ヲ以テ製セザルベカラズ。

抑モ大谷氏ノ試験法ニテ檢出セラル、物質ハ何ゾヤ、夫レニ關シテ從來ニツノ説アリ、大谷博士ハ曰ク『結核患者ノ示ス枸橼酸加血液喰菌現象ハ其一半ハ易熱性ノ喰菌促進物質ニヨリ、他ノ一半ハ「トロービン」若クハ喰菌雙攝體ニヨリ惹起セラル、モノナリ、而シテ「トロービン」若クハ喰菌雙攝體ヲ缺ク場合ニモ易熱性ノ該物質存在スルナラバ喰菌現象ハ起ルモノナリ』ト即チ易熱性喰菌促進物質ニ重キヲ置キタリ。

夫レニ反シ椎葉芳彌君ハ腸「チフス」患者ニ於ケル實驗ヨリ歸納シテ曰ク『腸チフス患者ノ示ス該喰菌現象ハ「トロービン」若クハ易熱性ノ「トロービン」系ニ屬スベキ喰菌促進物質ニヨリ起ルモノナリ』ト、即チ「トロービン」ニ重キヲ置キタリ。今此兩説ヲ比較スルトキハ易熱性ノ喰菌促進物質ヲ認ムル點ニ就キテハ兩者其見解ヲ一ニスレドモ更ニ進ンデ其物質ガ單體ナルカ複合體ナルカハ未ダ一定セズ、次ニ「トロービン」ノ參與スル點ニ就キテハ兩説一致スレドモ喰菌雙攝體ニ就キテハ大谷博士ハ參與スト主張シ椎葉君ハ之レニ反スト。

然シナガラ是等兩説ノ根據トナル實驗ヲ見ルニ不備ノ點アルヲ免カレズ、血漿中ノ易熱性ノ喰菌促進物質ト稱シ居ラルルモ直接血漿ヲ加熱ニ對スル抵抗力ヲ證明シタルニ非ズ、マタ、「トロービン」或ハ喰菌雙攝體ノ參與ヲ主張スレドモ直接血漿中ニ該物質ヲ證明シタルニモ非ラズ其證明法ハ同一患者ニ於テ血清中ニ「トロービン」若クハ喰菌雙攝體ヲ證明シ得レバ血漿中ニモ該物質アリテ喰菌現象ニ參與スルナリトタゞ推定シ居ルナリ。余ハ斯クノ如キ間接ノ證明法ニテハ不完全ナリト思惟セシガ故ニ、直接血漿ヲ加熱シ易熱性喰菌促進物質アラバ之レヲ破壞シ以テ其存在ヲ證シ、又「トロービン」存在スルナラバ直接血漿中ニ「トロービン」ヲ證明セント欲シタリ。斯クシテ大谷氏法ニヨリ得ラル、喰菌促進物質ノ本態ヲ鮮明ニセントス。

余ハ結核患者及腸「チフス」患者ヨリ同時ニ血清ト血漿トヲ得加熱シ比較シタリ。

結核試験成績

一、結核ニ於ケル「トローピン」ヲ證明シ得ルモノト然ラザルモノトアリテ、血清中ニ「トローピン」ヲ證明シ得ルモノハ血漿中ニモ證明シ得タリ、而シテ其「トローピン」ハ攝氏六十五度十分間ニテ破壊スルモノナルヲ知レリ。

二、大谷氏試験法ニテ七十三%ノ喰菌度ヲ有スル血漿ヲ攝氏五十五度十分間加熱シタル結果二〇%（之レハ「トローピン」ヲ含ム）ニ減ジ又同ジク八十二%ヲ有スル血漿ヲ加熱シ一〇%ニ減ゼシメタリ、是等ノ熱ニヨル破壊ハ易熱性ナルヲ證シ得ベシ。

故ニ結核ニ於テハ大谷氏法ニテ得ラル、物質ハ全然易熱性喰菌促進物質ヨリナル時ト同時ニ「トローピン」ノ共存スル時ト兩者アルヲ知レリ。即チ大谷博士ノ說ヲ實證シ得タリ。

腸「チフス」試験成績

一、腸「チフス」患者ニ於テハ每常必ズ「トローピン」ヲ證明シ得ルコト、血清血漿ノ別ナク何レニモ存在スルナリ。而シテ攝氏七十五度三十分ニテ破壊スルヲ知レリ。

二、大谷氏試験法ニテ四十六%ノ喰菌度ヲ有シタル血漿ヲ攝氏五十五度三十分加熱スルトキハ三十一%ニ減ズ、此ノ減少ハ易熱性喰菌促進物質ノ破壊ヲ示シ居ルモノニシテ、熱ニ耐ヘ得ルモノ即チ三十一%ノ喰菌度ヲ有スル血漿ハ「トローピン」ナリ。

故ニ腸「チフス」ニ於テハ大谷氏法ニテ得ラル、物質ハ「トローピン」及易熱性喰菌促進物質ナリ。即チ椎葉君ノ說ヲモ實證シ得タリト信ズ。

要スルニ大谷氏法ニテ檢出シ得ラル、モノハ易熱性喰菌促進物質及「トローピン」ナリ。

從來大谷氏試験法ノ診斷上ノ價值ニ就テハ結核及ビ腸「チフス」ニ於テ何レモ卓越シタル成績ヲ示シタリ、然シナガラ其檢出セラル、物質ニ就テハ明瞭ヲ缺キタル觀アリ。今茲ニ結核ニ於テ易熱性喰菌促進物質ヲ明瞭ニスルヲ得タリ。

結論

◎結核患者ニ於ケル喰菌促進物質ハ易熱性喰菌促進物質「トローピン」及喰菌雙攝體ノ三種ナリ。

從來特異性ヲ有スル喰菌促進物質ハ耐熱性ナルニ反シ易熱性ニシテ然カモ特異性ヲ有スルハ注目ニ價ヒスル所ナリ。
質問ニ答ヘテ

- 一、易熱性喰菌促進物質ヲ血漿中ニ含マル、分量ハ患者ニヨリ差異アリ。
- 二、試験ニ供シタル白血球ハ洗滌セル人白血球ヲ用ヒタリ。

(自抄)

結核診斷ニ於ケル大谷氏喰菌現象ノ價値

秋 元 健 兒 君 (東京)

本誌第一號ニ於ケル同君原著參照

余ガ「ホモゲ子クルツール」ニヨル結核菌ノ研究

川 村 六 郎 君 (東京)

「アルカリ」性卵黃水(約一六・〇乃至二〇・〇%)ノ比ニ蒸餾水ニ溶解シタルモノヲ四・〇%「グリセリン」加寒天ニ加ヘタル培養基ニ結核菌ヲ培養スルトキハ、菌苔ノ性質漸次濕潤軟化シテ遂ニ肉汁中ニ全ク平等ニ發育スルニ至ル、而シテ之ノ如ク一旦「ホモゲ子クルツール」ヲ得タル結核菌ハ代ヲ重ヌルニ從ヒ寒天培養基上ニ於ケル發育性ヲモ全ク一變シテ恰カモ腐敗菌菌苔ノ如ク濕潤光澤アル厚キ菌苔ヲ生ズルニ至ル、之ノ如ク變化シタル結核菌ハ動物竝ニ寒天培養基ヲ通ズルモ遂ニ原株ニ還元セザルニ至ル。

之ノ如クシテ今迄既ニ變化セシメタル菌株ハ人型二種、牛型一種、鳥型一種ヲ得タリ、而シテ其生物學的性状ヲ檢スルニ形態、染色性等ニ敢テ異狀ナク、唯培養性、毒力及び免疫性ヲ變化スルノミナリ、即チ毒力ハ一般ニ減弱スルモ、シカ

モ尙ホ一定ノ毒性ヲ證明シ得ベク、免疫反應中殊ニ凝集反應、補體結合試驗ハ絶對的特異性ヲ發揮シ、當ニ病原性、非病原性抗酸菌ヲ區別シ得ルノミナラズ、從來何人モ成功セザリシ人、牛、鳥型結核菌ヲモ明カニ類別シ得ルヲ證セリ。

之ノ如ク「ホモゲ子クルツール」トナレル結核菌ノ特異免疫性ヲ發揮スルニ至リタルハ畢竟菌體周圍ノ蠟樣質最少限ニ止マリ、敢テ増減セザルヲ以テ從ツテ免疫性ヲ障礙スル物質ノ動搖ヲ見ズ、茲ニ菌體「アンチーゲン、アツ巴拉ート」ノ一定ヲ得テ始メテ菌固有ノ生物的性状ヲ發揮スルニ至ルモノナラン、蓋シ結核菌ノ特種培養基ヲ通過スルニ依リテ之ノ如キ「Transformation」ヲ呈スルハ好適ナル生物順應症ヲ證明シテ興味アル事實ナリト信ズ。

其他「ホモゲ子クルツール」結核菌ヲ「ザボニン」及ビ膽汁加肉汁中ニ培養スルニ前者ハ十%、後者ハ二十%ニ於テ尙ホ能ク發育ス、依テ其培養ヲ傳代シ以テカルメット及ビ有馬氏等ノ無毒結核菌培養ヲ覆試中ナリ、但シ目下四代ヲ經ルモ抗酸性ハ依然トシテ存シ、毒力ハ尙ホ不明ナリ。

(自抄)

凝集反應ニ依ル結核診斷液供覽

川 村 六 郎 君 (東京)

結核患者血清ニ對スル凝集反應ハアロアン氏ノ唱導以來幾多ノ研究報告アルモ、何レモ皆其診斷的價值ナキニ傾ケリ、然レドモ要スルニ其原因適當ナル凝集用菌液ヲ得ラレザルニアルハ勿論ナリ、余ガ「ホモゲ子クルツール」ハ全ク平等ニ濁シ數日間放置スルモ決シテ沈澱セズ、殊ニ免疫動物血清ニ對スル凝集反應ハ頗ル顯著ニシテ且ツ特異ナルヲ證明シタルヲ以テ、茲ニ試ミ患者非患者血清ニ對スル試驗ヲ行ヒタリ。

然ルニ結核患者ニテハ全部陽性ナリシモ非結核患者血清ハ血清稀釋度ニ應ジテ多少ノ反應アリ、即チ十倍稀釋ニテハ約七%ニシテ殆ドビルケ氏反應又ハ非結核死者解剖ノ成績ト略一致シ、漸次稀釋度高キニ應ジテ反應少ク八十倍稀釋ニア

リテハ結核患者ニ比シテ非結核患者ニテハ極メテ少キ%ニ過ギズ、シカモ之ノ非結核患者ト稱スルハワッセルマン氏反應検査ノ爲送付シ來レル血清ノ殘餘ニツキテ検査シタルモノナルヲ以テ果シテ結核ノ有無ハ斷言スルヲ得ズ、從ツテ本反應ニ一定度迄診斷ノ補助タルヲ得ンカ、須ラク今後多數ノ實驗ヲ重テ更ニ報告スル所アルベシ。
(自抄)

結核病期觀ノ綜評

醫學博士 佐 多 愛 彦 君 (大阪)

病理學乃至免疫學上ノ見地ヨリ演者ガ年來主張セル結核病期觀ヲ詳細ニ互リテ説明スル所アリタリ。

佐多君ノ演說ニ對スル附議

醫學博士 高 田 畊 安 君 (東京)

臨牀上ノ目的ニハ寧ロ自己ノ分類法ヲ勝サレリトテ本誌第一號所載同君原著ノ主意ヲ述ブ。(第一號原著參照)